昨年の史學・考古學・地理學界

史學一般　本欄は相變らず寂莫を感ずるが著書では先づ「歴史學及歴史教育の本質」(中川一男)を擧げねばならぬ、二編に分れ、前編は史料の研究批判解釋から史觀の發達推移並に史學の構成を論じ、後編は史學と教育上の所謂歴史科との關係を明にし更に歴史教育の目的價値殊に國史教育、外國史教育それ〴〵の目的方法を論述した力作であつて斯うした著述の少い今日特に讀書界に推擧したい。雜誌に見えた論文では「歴史の研究」(新見吉治史林)は歴史の研究を修史と讀史に分け前者では各々專門學科に於ける歴史研究の成果を利用して所謂綜合史は統一的新解釋を試むべしとし後者に於ては東西の歴史を通覽して共通の法則を發見するが其の進むべき路程である、殊にこの點で好條件にある本邦學者の奮勵すべき舞臺であるとしてゐる。「國史學の骨髓」(平泉澄、史學雜誌)は歴史の認識は知的活動の外に情意の活動を必要とし我自らの行を通してのみ得られる、これは祖國の歴史でなければ不可能であり具體化した歴史の研究は勿論、抽象的で一見世界的共通と思はれる史學の原理、研究法も亦其の國土に於て各々異ならざるをえぬとし、「史學入門に關する一二の管見」(佐藤堅司、同誌)は初學者の心得べき事項として數項を掲げ就中科學的綜合の意味に注意を加へ、史學に於て強いて絶對の法則を發見せんとすれば歴史哲學者流の法則化に墮する、但、史實間にも共通した脈絡はあるからそれを辿つて普遍相を見出し時代の中心傾向を發見するを要するとし、「史觀の本質」(田村德治、法學論叢)は行政法學の研究上史觀の研究は重大な關係ありとこの見地に立ち、對象、思惟方法から史觀の成立を考察し、更に各種の史觀の由て起る所以を論じ且、それ

らの相互の關係各自の特長を論究し史觀は最普通の場合には哲學的ではなく其の思惟方法上成立の要件としては科學的といふ制限を附すべしとある。「文化史發展の跡を顧みて」(小林孤村、國學院雜誌)は政治史教會史に對して文化史の起つた所以を說き、その完成に與つたリール、コントの史觀に論及最後に著書數種に就いてランプレヒトの文化史觀を論述したもの、「往古の歷史的觀念」(宮崎勇藏、同誌)はシーザータシタス、ツールのグレゴリ、リンブルガー年代記等に見えてゐる主としてゲルマンの古代に關する歷史觀の叙述である。「カントの歷史哲學」(高坂正顯、思想)はカントの經驗的歷史學と歷史哲學並に歷史哲學的諸法に就いて說明を試み、次にカントは形而上界を對象とする意味の歷史を批判期以後の諸著作に於て如何に取り扱つてゐるかを論じ「社會の實體論的概念」(黑川純一、哲學雜誌)はジンメルの歷史認識がカントの自然認識の影響を受けてゐること其の歷史認識が如何なる樣式に於て社會概念に影響しまた社會學に如何なる役目を演ずるかと論述し「トーマス・バックルの歷史觀」(德重淺吉佛教研究)は宿命說、自由意思說を排して因果の理法をのみ重視したバックルは其原理を立證せんとしてドグマに陷つた憾はあるが彼の研究の獨創的にして深く且廣いことを推重し、「歷史的社會的學問殊に經濟學の方法論について」(本多謙三、思想)は所謂古典主義と歷史主義の對立、はマックス・ウエーバーによつて各々其の適當な位置に置かれたこと並に現實的生活から乖離しようとした經濟學の研究を救濟しようとする歷史學派の理念は一般に歷史的社會的學問の認識の基礎たるべきものと論斷し、「歷史と攝理」(三谷隆正、同誌)は唯物史觀の力說する機械律、必然律を排し歷史の基底は理想にありとし歷史を導く統一的理想の道程は要約すれば攝理にありといひ「歷史的唯物論の倫理的理想の問題」(佐野學、太陽)は唯物論者は理想を無視し、否定するものではなく唯理想を天上界から人間界に引き下したに過ぎぬ而かも之を規定するものは物質的生活に外ならずとしこの理想を追求して人間が人間の歷史をつくる、だから唯物論者にして初めて新らしい世界史を書き得ると說く、「基礎科學として

の一般人類學及應用人類學」（西村眞次、同誌）は人類學が今尚一般に輕視されることを歎じ人類學は人類を體質と文化の二方面から考察するを要する、畢竟生物學の唯物的傾向と哲學の唯心的傾向とを調和することにより全體としての人類を研究するものであるから人類學的研究は史學の基礎でなければ、ならぬと力說してゐる。

〔菅原〕

國史　大正十五年十二月二十五日に大正天皇晏駕し給うて昭和の新元號に改め給うや、昭和新政なる語が使用せられ、明治大正を一時代として之を回顧せんとする要求は、國史界のみならず、一般思想界に現はれた著しい色彩となつた、乍去、さすがに諒闇の一年――少くともその前四半年は何となう黑ずんだ空氣の中に、先帝の鴻恩を惟ふ念のみ强く中央史壇はその機運に棹してその二月號に於て「大正の天皇を偲び奉る」（本多辰次郎）「大正の聖代を回顧して」（芝葛盛）「大正の政治及び社會運動」（渡邊幾治郎）「大行天皇と威仁親王」（武田勝藏）以下の原稿を收輯して大正治績の一般を記さんと試みたものがあつた。

其と事は別ではあるが、一昨年秋その御在位が確認せられて史界を賑した長慶天皇の御在位に關する研究また年始を飾つたトピックであつた。それに就ては先づ「長慶天皇皇統御加列に就て」（三上參次、國學院雜誌）及び「長慶天皇を仰ぎ奉りて」（芝葛盛、同誌）の二つが何れも長慶天皇の御在位が確認せらるゝに至つた徑路及びその理由を詳密に亙つて說明し、この史上の難問が解決せらるゝに至るまでの苦心を語つたが、それにもまして吾人の注目したのは「長慶天皇御在位決定に至る迄」（三浦周行、歷史と地理）であつた。臨時御歷史史實考査委員會の委員として、暫く沈默を守られた博士が、從來發表された御在位決定の推定とは全然違つた方面から研究されたもので、嘉喜門院集に正平廿三年諒闇の頃內の御方より櫻の花の散つた枝に附けて御製を母女院に奉られた記事があるので少くとも櫻の花の散つた頃に新帝の踐祚があつた事を示すものであり、また同年八月に東宮からの御歌が同母院に屆いたので、八月頃には皇太子も定つて

居つた事を知る。次に富岡家本の新葉和歌集奥書から弘和元年の頃南朝に慶壽院法皇と仰せられた御方が御在位であつた事が知られ、その慶壽院の御子海明和尚といふのは承朝といふ人で、この人が長慶院の遺命を奉じて居る事から推すと慶壽院と長慶院とは同一の方であると、御龜山天皇の御兄にして、弘和三年十月二十七日から元中元年閏九月八日迄の間に御退位があつたとするものであつて、故八代博士の論著でなほ論じ盡されなかつた點を充分に檢討されたものであつた。

扨、例によつて一般史の方面から筆を染むれば、先づ「國史大觀」(大阪放送局)を擧げねばならぬ。これは大阪放送局が開催した國史講座の講演筆記を纒めて出版したものであるが、一通り、しかも可なり高級な通論を知らんとするものには非常に都合のよいものであらうと思はれ、外觀は小さいが國史の概論として近年稀に見る便利なものであつたであらうと信ずる。次で「法制史上より見たる日本農民の生活、律令時代下」(瀧川政治郎)はその上卷に於ては律令時代に於ける農民生活を收入の方向より見た事に續いて、下卷は支出の方面より觀察し、第一章には租稅制度並びに兵役の制度より之を論じ、田租は輕かつたけれども、調庸が比較にならない程重く、且つ非常に重い雜徭や雜稅が課せられたゝめに其總和は口分田として受ける總收入の大半に達したゝめに、各種の手段を講じて脫稅を計つたのであると斷じ、第二章に於ては地方行政制度より觀たる農民の生活を描き、我國法制の缺陷は充分に農民の生活を脅したものであるが、更に猛惡なる地方官によつて行政事務が執行されたために莊園が發生し武家が勃興したのは社會上經濟上必然の歸結であると論じた。それに關聯して「奈良時代の雇傭制度と賃銀の種々相」(同氏、史學雜誌)を說いたものがあるのは見落す事が出來ないものである。また「奈良朝時代民政經濟の數的研究」(澤田吾一)は必ず對照さるべきものである。就中、その時代の人口を求むるために鄕、驛、京師の人口を推定して之を合計し、また別に一般的に人口と出擧稻との比例より總人口を求め、また更に諸國各別に兵員より入口を求めて、此三者を比較對照し、何れよ

りするも五百萬乃至六百萬なるべしと、斗量に就ては從來の說の杜撰なるを排斥し、和銅大升の一升は今の約四合に當り、減大升は今の約二合八勺に當るとし、男子一人の口分田の穫米は二石七斗七升三合で、今の約一石一斗三升四合に當り、女は今の約七斗五升六合、一日分にすると男三合一勺女二合一勺にすぎないので口分田のみでは到底食料に足らないとし、以て當局が百姓に新田開發を奬勵した政策を賢明であると讃嘆せられたものがある、また國民の負擔額は平均一戸の租庸調雜庸は合計四萬七十三束六把となり、收穫は一千六百八十一束六把であるから公課は二割八分二厘で、江戸時代の五公五民と比しても其の半分にしか當らないと言つた點は、瀧川氏の說と比して最も注意すべき點であらうと思ふ。

時代がずつと下つて莊民の生活を描いたものに、「莊民の生活(再び)」(中村直勝、史林)があるこれは中世に於ける山城宇治田原莊をとらへたもので、其中心であつた禪定寺が本莊を平等院に寄進し、これが顯通から師實、忠實、高陽院、忠通、基實と近衞家に傳へられた徑路を

語り、其東隣倉東庄が最勝金剛院領として、九條家を本所とするに至つたから、この兩庄間に乾元以後數度の堺相論を惹起し、大田谷の所屬を爭ひ、相方に刄傷强奪が行はれたけれども、結局、地表測定法の不完全なために果しのつかぬ長爭となつた事を述べ、宇治田原莊民の間に寄人と稱する一階級があつて、此相論の中心勢力であつたとして居るが、また「鎌倉時代に於ける吏僚生活の一面」(櫻井秀、史林)を描き、當代の公卿及びその下僚が著しく前代より人員の增加るせ事と頽廢的傾向のあつた事を指適し、それは彼等吏僚生活の前途が殆んど宿命的に決定され、權門勢家又は狂女と聯絡なき限り如何ともする事が出來なかつた事と前代よりも一層女性文化に迎合せんとした事に起因すとし、また年少官吏の活躍また此時代吏僚生活の一面であるとせると共に、當時代にある共通な社會相の裏面を知る事が出來るであらうと思ふ。これについて「綜合日本史大系南北朝」(魚澄惣五郎)と「南朝の研究」(中村直勝)は共にある意味に於て近世期の母胎である所の南北朝を取扱へるものであるが、何れ

も共に政治史方面よりも寧ろ思想史として、また人物論として見るときに、一層興味を有するものである事を注意するに止め、次には「綜合日本史大系江戸時代上」（栗田元治）に眼を向ける事にする。第一章に於て國史上に於ける江戸時代の位置を明かにし、第二章より第四章に亘りて江戸幕府が武斷主義より文治主義へ推移する徑路を詳述し、次で交通の進歩、貨幣の流通、都市の興隆、企業の發達等の國民經濟の發達が細かに討究せられ、その他の學問宗教藝術を論じて極めて巧妙な組織の下に複雜なる社會現象を處理してある。また「近世史の發展と國學者の運動」（竹岡勝也）に於て眞淵春滿以下が皇國本來の面目を知らんがために中葉以降の外來思想である儒教佛教を取り除け、或は排佛となり、或は唐心脫却となり、以つて始めて我國上代の社會を支配した神々の道に接する事が出來ると考へたのであるとして、彼等の神々の外道に生きようとする生活態度が必然的に倫理的運動となつて近世史上に展開した事を絮說し、以て明治維新の先驅者を舞臺に上せた。その次の時代を通觀したものには卽ち「幕末史概說」（井野邊茂雄）で、維新の政變を以て社會的若くば經濟的原因によるとする世說を否定し、純然たる政治的變革であるといふ見地に立つて、水戸藩の勢力と幕府との衝突があらゆる政爭に根柢を爲せる事を論じ、井伊大老死後に於ける各藩の活動、攘夷卽討幕に變化せる理由、薩藩の態度が漸次幕府に背かんとする變化の原因、朝廷に於ける中心勢力の移動、討幕派と公議政體派との衝突が戊辰の役を激成せる所以等を縱橫自在に論說して居り、別に同氏の著になる「幕末史の研究」が著者の其方面の研究論著中から二十數篇を擇んで一冊に纏めたものであるが、之を政治・外交の兩篇に分ちて收載してある。前者の中には松平定信の補佐就任、水戸藩朋黨の起因、同藩の廢佛毀釋、同藩の密訴問答、寺田屋事變、坂下事變、薩長土三藩の態度、佐久間象山、田中河內介、以下を含み、後者の中には、幕府の對外政策松平定信の對露政策、佐久間象山の對外意見、林子平の處罪、水戸學派の攘夷論を始め、對英思想の變遷、打拂令復古の內議、耶蘇敎觀の變遷、蘭學の起原、蘭學者の

態度等の如き、對外思想の變移までを收めてあるもので前書の各論に相當するものである。而して「至誠の人井伊大老」(中村勝麿、史學研究錄)に於て大老と仙英禪師や浪士國學者長野大人との關係を微妙なる社會と個人との交渉によつて、生ずる史的關係に基いて記して居るのは、前二書の一別傳とも言はゞ言へようと思ふ。それについで「文久三年八月に於ける七藩の直奏に就いて」(松野遵宗、史林)從來この大和行幸御親征の儀御取止めに關する直奏は因備米阿四藩の連署のものと解されて居つたけれども、近江大溝の分部侯、肥前新田の松浦侯、因州新田の池田侯も加はつた七藩のものである事を明かにし、鷹司關白右大臣二條齊敬からの依頼によつて鳥取の池田慶德侯が種々祕計した事情を詳述し所謂八月十八日の政變のために御親征が中止された事になつたが、その誘因に七藩の直奏が與つて力ある事を說いたものは、大和行幸の由來する所を極めて詳密明快にしたものとして、茲に併記して置きたい。

前年來、幕末維新の研究が、斯界の一中心となつて居つたが、その情勢は昨年に至つても止む所なく各方面に瀰漫したが、更にそれは多少の方向變化をなして明治時代の研究が試みらるゝ事になつた、それは一つは幕末維新研究の繼續であるけれども、一つはまた大正時代の終末といふ事と度々の大震災が敎ゆる史料保存の必要と云ふ事に刺戟せられたものとも見る事が出來よう。その方面に於ては「明治史の光明面」(三浦周行、改造)を描き、當時政界の新風潮であつた公議輿論の精神は、中央のみならず、地方に向つても滔々と瀰漫し高知縣熊谷縣筑摩縣の如き早くも一定の日に縣令以下の官吏や區長神官等の中から選ばれたるものを集めて會議を開いたし更にまた民間にも自發的な有志の會合が開かれて居つた事、また社會の特相として維新に際して最も打擊を受けたのは、武士階級であつたけれども、其傳統的氣質や修養のため其變革にも善所すべき素質を有したから、政爭の中心も敎育の主腦も彼等であつて最も利益を享けた庶民は武士から敎育され、新政の御趣意を了解したのである。而して御趣意が判つて見れば中心新政を謳歌して士

族の煽動には少しも乘らなくなつたのである。特に穢多非人の稱號を廢して平民籍に編入した事は、新政府社會改革の最頂點であつたことせるに對應して、その暗黑面の一齣として「明治初年の國體擁護運動」(藤井甚太郎、史林)を述べ、明治維新が神武創業の古に歸つて國家本來の面目に更らたまつたものであるのに、その直後に於て國體擁護なぞと申す不思議な言葉が叫ばれた、それは横井小楠大村益次郎が斬姦された其の主旨の口供書等によつても明かなる如く、西洋の學問をなし、洋裝を着用し且つ邪教を信奉するものとして一部の人々から排斥せられたのであつて、明治五六年に亙る島津久光公の建議にも萬古不易の皇統も共和政治の惡弊に陷られ終には洋夷の屬國となるべしと言つて居り、またかの洋學の如きは一種の技藝にして至尊の急にし給う所でないと建言して居るので所謂國體擁護者の所信が明かであるとして世態混淆の一面を示したもの「明治維新の主潮」(森谷秀亮、歴史教育)を說き、その始めは幕府及び諸藩の存在を否定せんとする卽ち封建制度撤廢は、決して明治前の主潮ではない、それ故に藩制稅制兵制の變革に遭つて曾て身を忘れて國事に奔走した多數の武士が逆境に沈淪するに至つて其の不平は著しく燃えた、殊にそれは勤王と目せられた西南諸藩に多かつた。十五年頃に最高潮に達した自由民權の聲は、舊武士がその不平を武力から言論に轉じたものに外ならぬとしたもの並びに「明治維新成功の要素」(三浦周行、經濟往來)を說き國民の間に改革の根柢について豫備知識があり理解のあつた事、卽ち倒幕して天皇親政にしようとする目的が、維新の理想であつた建武中興と共通のものであつた事、それから大政復古といふ歴史的回顧の保守的なものと、王政維新てふ進步的な二元的な原動力があつて、これが並行し雁行し先後して進んだのである事、また君民の接近と人民の發見並びに國民の對外的に自國を强く意識した事がそれであると言へるは、大に聽くべきであらうと思ふ。なほ此時に當りて「松菊木戸公傳」(木戸公傳記編纂所編)が出版せられた事は「大久保甲東先生」(德富猪一郎)が出た事と「岩倉公實記」が復刊された事と相呼應して所謂維新三傑の

傳記が揃うたのも、一奇こいへば一奇であり當然こ言へば當然であつた。

外交の方面に於ては「日支交通史」（木宮泰彦）の下卷が發行されて南宋こ我國この貿易より筆を起し、元、明、清こ我國この間に交された文化の接觸を力說して居る。入元僧の目的は必ずしも參禪辨道のためのみではない、漫遊的氣分に驅られた事もあつたこ言ひ、又寺院制度をも輸入して、五山十刹を設け安國寺利生塔を建立した事や、唐樣の茶會が日本化せられて喫茶の風習までも將來した事や、本朝明人のために鏤刻の業が進んだ事、歸化明清人が我が醫學の進歩に貢獻した事までも力說し、また天龍寺船は單に通商のためのものでなく、彼地の高僧を招致する事もたしかに當時交通の一目的であつたこして居る。それに對比して「日明外交の本質」（三浦周行、藝文）を論じ、それはどこまでも貿易によりて得る利益に存したのである事は、義滿が第一回の派遣使節に人もあらうに筑紫の商人肥富某を以てした事によりても明かに知らるゝのである。この利益を得んためには一種の變則外交をやつたもので、我國皇室からの使節ではなく、將軍又は前將軍の私的外交をなし、支那古來からの傳統的外交貿易政策に順應したのである、しかし明國側から言へばために海寇を封じて呉れるのであるから、多少の無理を通させてやつたのであるこしたものもある。「日明貿易の發展につきて」（同氏、史林）栢原氏が嘗て試みた時代區分を剖檢し、義滿の應永八年遣明船を重視せず天龍寺船の繼續こ見做せる態度を不可こし、其間公私の別を始め本質の上に於ても多大の徑庭ありこなし、もし時代區分をするならばそれをしも第一の區劃こ認むべく、第二は寶德三年までゝあつて、それは將軍の財政窮乏から、大名・寺社乃至豪商の出資を求め、それに進貢船進物の名を與へ、その名に於てのみ得らるゝ、有利な貿易に從來させ坐ながら多大の利益を收めやうこした時代であり、更に寛正六年以後を一期こすべく、この時期に於ては、第一に日本側から見て收益本位の外に政治的意味も加へられ、幕府、細川氏、大内氏の爭奪が渦卷いた事第二に大内氏の勢力の加はつた事、第三に細川氏の參加

第四に日明兩國の產業上の疲弊、第五には宣德條約を守つて遣明船の隻數を減じた事、第六は明の報聘使節が殆んど來朝しなかつた事、第七對明貿易港として新に堺が出現した事、第八は內海航路よりも南海路により土佐から九州の南に出た航路に變更した事及び第九としては前期よりも目立つて商人の勢力が增大した事の九要點を揚げる事が出來るとしてある。その對明貿易が馴致した史上の一齣である。「豐臣秀吉の臺灣征伐計畫につきて」(岩生成一、史學雜誌)當時東亞國際間に於ける臺灣の位置を研究し、明國化外の一島たる臺灣が遠く印度支那方面にまで活躍せる倭寇に取りては絕好の寄泊地であり、支那人を招いて密貿易をなす最も適當な地點であるとし、原田喜右衞門の船に同船した明人アントニオ・ロベスが秀吉に臺灣征伐の計畫ある事を耳にしたのは、少くとも前田侯爵家に現存する文祿二年十一月五日の高山國の來服を促す書翰の日附より一ヶ年以前の事である。然らば臺灣に密接の關係ある南支に於ても海上警備のあつた事は當然の事である。或は想像を逞うすれば、秀吉の高山國招致は始めから兵を動かす意志なく、單に宣傳にすぎなかつたかも知れない、而して臺灣招諭には失敗したけれども、南の方イスパニア人を驚かし福建方面の支那人を恐れしめた事になつたと言はねばなるまいとして當時東洋海上に活躍した列國に臺灣を中心として激しき葛藤が釀せられて居つた事情を究明したものである。

法制史の方面に於ても、最も賑かであつたのは德川及明治の研究であるが、まづ吾人は「十七條憲法と羅馬の十二表法との比較」(牧健二、歷史と地理)を試みたものから記すであらう。前者は專ら君主權の尊嚴を明かにし官吏の政務執行の原理を敎へた一種の敎令法であり、後者は最多くの努力を訴訟に依りて擁護せられ得べき公私權の規定に費して居り、兩者は根本的に相違した概念を基礎として成立して居るものであつて、一は支那の法律思想に由來し他は羅馬のそれに由來するために生ずるものであらうけれども、聖德太子が三經義疏に於て法又は經の註釋に修多羅を用ゐて居られるが十二表法に見ゆる jus なる語は梵語の ju より出ると言はるゝ點に於て、

羅馬法もまた古代印度の法律思想に結びついて居るものがある。されば其點に於て十七條憲法に存在する印度思想の流は遠く十二表法に一脈の相通ずるものがあると言ふべきであるとし、更に「我が中世の寺院法に於ける僧侶集會」(同氏、法學論叢)を主題として、僧侶集會の由來を述べ、その重なる僧侶集會の種類を擧げ、それらの僧侶集會に於ける多數決制度が戒律の羯磨作法に於ける和合の精神に由來し僧衆の觀念は多數決制度を發達せしめたのであるとしてこゝにも印度思想影響の一節を擧げて居るのも首尾するものである。又「鎌倉幕府の法治主義と其影響」(三浦周行、史學雜誌)と題して、先づ鎌倉幕府が實朝の遭難や承久役によりて御家人の蒙つた精神的大打擊を癒やさうとして取つた法治主義は、幕府の政策として最も賢明なものであつた事を指摘し、ために御家人の間に個人主義平等主義が擡頭して來た、それがために階級的であり差別的である家族制度の弛緩となつて親の處分を認めぬような主張を以て法廷に爭ふ事實があつた事は、父母が總領たる場合、相續人の地位が非常に不安であつた狀態から誘き出さる法治主義の深刻なる影響であるとせるものはまた「中世の幕府法に於ける土地財産權確認制度」(牧健二、法學論叢)を說いて先づ所領安堵に依る土地財産權確認制度の概念及びその沿革を述べ、次に土地財産權の相續及び移轉の確認として讓狀安堵、沽却地及び質流地の安堵、和與及び寄進地安堵の手續を述べ、更に土地財産權存在が積極的に確認せらるゝ場合の所領安堵を、當知行地、不知行地、舊知行地の三種の安堵に分ちて考察し各種の場合を擧げたものであると共に、武家幕府時代に於ける財産法として併せ見る事が出來る。而してその武家幕府法も近世期のそれに至つては、その對象とする階級が漸次庶民に向つた事は否むべくもない。それについて「德川時代に於ける農業水利の權利關係」(西崎正、國家學會雜誌)を說明せんために、前半に於て、先づ水論が裁判所に訴訟として提出されたる時の手續を述べ、德川時代の水論は、大體に於て權利妨害除去並豫防請求の訴と新行爲承認請求の訴とに二分され、共に十二ヶ月といふ一定の出訴期間があるが、い

よ〳〵評定所に受理されたる訴訟は、先づ第一に評定所は訴訟方及相手方を召喚出頭せしめて和解熟談すべきを命じ一應訴狀を下附する、次にその調停が成らない時は當該事件の審理に着手し、當該者の聽取、證據書類の審査、實地檢證をなし、次に判決を下し、當事者より以後和融致し再論致すまじき由の請證文を出さしめ、論所を表す地圖を作製し、裏面に判決の要旨及び裁判官及評定所の奉行等が連署連印する事を記述し、後半に於て水利の權利關係を說くために灌漑と排水の兩部分に分け前者に於ては自然流水の利用及び池沼水の利用に際する施設（堰、井路）、用水組合村の內部關係、水元村と受益村との關係を見、後者に於ては排水の設定、水上村と水下村との關係、防水等に就て叙說してあるし「德川時代に於ける雇傭法の研究」（金田平一郎、同誌）は、雇傭を繼續的の勞務供給契約である奉公及弟子奉公と非繼續的勞務供給契約たる日用契約及び職業上の勞働契約に分けて考究し、德川時代程雇傭に關する法制が詳細であり廣汎である時代は、我國には無比であるとし、又その勞務を內容とする契約は、雇傭契約と請負契約と封建法上の主從契約とがある事を指摘し、最後に、總體として身分的な分子が次第に失はれて典型的な債權契約に接近する傾向がある、これ此時の雇傭契約が、封建的分子を含む契約から現代的雇傭に進む過渡期である事を示す、次で「明治初年に於ける土地永代賣買の解禁」（牧健二、歷史と地理）は幕府法に於ては寬永二十年三月十日の法定により田地の永代賣買を停止し、諸藩又之に倣うものが多かつた。然るに明治新政府に於ては、二年の公議所に於て田地賣買を許すべしとする意見と許すべからずとする意見と二樣の議案が出たが、それとは別に神田孝平氏が田稅を改革して、金納にせしめんとし、その稅額は田地の地價を標準としてその何割を納付せしめやうとする說を出した。明治三年六月の事である。而して終に地券分一法による地租徵收の制度立てられ地所永代賣買を許容する事により五年二月十五日の太政官第五十號布告となつて公布せられた。而して之れは加藤弘藏氏神田孝平氏等の把有する自由思想に基き、私權の保護と自由の尊重が民

の幸福と國富とを增進する途を認め、賣買禁止を以て權利と自由とを抑壓するものと考へた事に基因するとしたものがあり「明治初年に於ける民事裁判の觀念」（同氏、史林）はやはり古來の東洋法律思想に基く君主が臣民の訴訟を聽いてやるといふ聽訟の觀念を主としたものであるが、明治八年に至つて西洋の民事裁判制度である國民の私法上の權利を保護するといふ私權の觀念に遭遇し、巧みに調和して民事と刑事とが分けて考へらるゝ樣になつたとして居る「明治初年の養子法」（高柳眞三、國家學會雜誌）は、家相續の自然的方面を斷然拋擲して專ら倫理的方面も活かさうとした事、我養子制は血脈嗣子に代るべき擬制嗣子である事、家の繼續を第一義目的とするもので、養親子關係は此目的に添ふための隨伴的なものに過ぎない事、が特色とすべきであるとし、更にその中に前代より繼受した法規中どれだけのものが保存されたかを一言したのはまた民法上の規定に關するものであらうが、それと同時に「明治初年に於ける村の人格」（中田薰、同誌）を論じて村の訴訟、村の租稅、村の契約、村の則產の四方面から剖檢吟味を遂げて、公法私法何れの法域に於ても、單一性と複多性とを兼ね有する總合人であつて、假令、日耳曼法系の Koerperschaft に全然一致しないまでも、之に近似して居る法人である點に於て、德川時代の町村と其根本的性質に於て一致するものであるとし、何れも明治初年の法制史研究として、これまた昨年の潮流の一つである經濟史の方面に於て單行本として出たものでは「日本金融經濟史の研究」（栗栖赳夫）その前編に於て日本經濟史を上古より近世に及びて概觀し、中古の救貧制度、中古に於ける役身折酬及奴隷賣買法、周防岩國川尻に於ける新田開發等を記し、後篇に於て出舉、質及抵當、無盡又は賴母子の制度や兩替商札差商の發達を說いて居る「土地總有史論」（石田文次郎）の中に「林野に對する我國入會制の沿革」を述べ入會關係の中心は、村中入會及村々入會であるとし、德川時代の村は、ローマ法の法人 Universitas はゲルマン論の團體 Genossenschaft に近い性質を有するとして居るのは、別出中田博士の「明治初年に於ける村の人格」と相應ずる說である。「元祿及び享保時

代に於ける經濟思想の研究」(中村孝也)は、生産經濟論、交換經濟論、分配經濟論、消費經濟論、財政論に分ちて、當時の經世學者の學說を剖檢したものであるし、また「封建社會崩壞過程の研究」(土屋喬雄)は舊金澤藩、舊鹿兒島藩、舊仙臺藩等の財政を解剖してその次第に窮乏に陷つた實際を檢討し商人のために諸侯及び武士階級が搾取されて行つた有樣を詳說してある。次にこの方面の研究を時代的に配列すると、先づ「我國上代の市について」(中村直勝、大調和)述べ、上代の市に於ては取引方法は物々交換でなく物資交換であつたらうし、市場の物品は決して餘剩生産品でなく賣品であつたらうとし、また市場は一種の刑場であつたらう事を指摘して居る。次は關所に關する研究であるが、「富士山と關所」(相田二郎、歷史地理)は前年の說を補考した物で、武田氏は戰國時代に於て富士登山者から關錢を徵收するために東西北の各登山口に關所を設け、夏期の一時的の收入を計つたものであるとし、更に「身延山の御會式と關所」(同氏、同誌)に就て觀察して恐らく武田氏は之を徵したらうけれども德川氏が甲斐に關係した文祿慶長頃には御會式に參詣する諸人には其所有品及び路錢に對して關所錢は免除して居る。

眼を轉じて吾人の視野に入るものは港灣の方面に於ける經濟上の問題である。それは先づ「古代の港」(三浦周行、經濟論叢)から始めらるべきである。ッが卽ち古代の港を示す詞である事から筆を起し、港灣の修築が非常な大事業であるために、到底一個人の力を以てする事は不可能であるから國家的事業に移さねばならないが、國家亦財的に疲弊して居るので、貴賤一般の歸依ある名僧の手によりて完成さるゝに至つた所以を明かにし、入港船に入港稅を課して以て修築費や設備費に支辨するに至つた事を擧げ、港が交通貿易に利用されたゝめに、此所に商品の保管と委託販賣を業とした問又は問丸が生じ、それが運送等、割符屋をも兼ねた事を指摘し、白拍子の如きものが港灣に繁茂した理由を併說したが、更に進んで「中世の港」(同氏、同誌)は、交通運輸が開け行くと共に概して順調の發達を遂げたので關稅の收入亦增加を來し、社寺は社殿堂舍の修造費として之を所得する樣に

なつたが終には全く收益を擧ぐるためのものになつてしまつた。それでは港灣自身の本來の目的に反するのみならず、種々の宿弊が生じたので關稅を撤廢せんとする政策も出で、また商人の中には關稅免除の特權をさへ有したものが生れた事を說き、次で「近世の港」(同氏、同誌)を見て、近世期に於ては海運の上に非常な變遷があつたゝめに、大阪は斷然頭角を現はし、各藩の國產は大阪の藏屋敷に到着する事となり、各種の都市計畫も行はれたとし、北海の面する港灣が西廻航路や江戶直航の開始に依て深刻なる影響を受けた事を言ひ、最後に敦賀より琵琶湖に通ぜんとする開鑿の計畫や、文化文政の頃西廻航路が外國船の出沒のために恐れられた關係から北國中國の船が敦賀に入港するに至つた事を記してある。またそれに關係を有つものとして「近世貿易の趨勢」(同氏、同誌)を論じ、長崎に於ける和蘭及び淸貿易が、輸入品として生絲其他の贅澤品が多かつたが、輸出品は金銀銅を以てしたのみならず淸國人のために耶蘇敎關係圖書の輸入もあるので、終に逐年制限を加へ以て之を唯一の對應

策と考へたので長崎港が年一年衰微した事情を詳述したものがある。また「德川時代に於ける長崎の支那貿易に就て」(矢野仁一、同誌)說き長崎の葡萄牙人の貿易は實はマカオで仕入れた支那品の貿易であつて、實際日本の外國貿易に於て最も必要なのは支那貨物であると斷じ、その支那貨物とは支那の絹及生糸であつた。しかもそれは支那に於ては輸出禁制品であつたのである、それにも拘らず夫が輸入されたのは國內の需要が盛であつた證であり、その輸入のために蒙る金銀の流出を救ふために當局は國內絹織物業を起さんと考へたのではないかとし、その生絲輸入が自由貿易であつたに慶長九年以來割符商人に依りて定められたる賣値段によつて取引されねばならぬといふ制限貿易になつたのは、支那貿易として重大な事件であるとして居るものは「寬永貞享時代の長崎の貿易に就いて」(同氏、史學雜誌)記したものと姉妹篇となるべきものでその中に長崎港の市法貨物商賣の廢止せられたのは貞享元年暮でそれが實行せられたのは翌二年そして糸割符法が再興されたのであるといひ、その市法

貨物商賈が廢止されたのは和蘭人歎願の結果ではなく、その眞因は長崎奉行を始め、長崎官場の官紀を振肅し、長崎の風紀を維持し、其の華美奢侈の風俗を抑制せんとする幕府の高等政策に外ならぬと斷じてあるのは注意を惹く。それについで吾人は江戸幕府の方に筆を移す事にしよう「元祿以前に於ける江戸幕府の財政に就いて」(栗田元次、史學雜誌)述べ、家康の時は財政安定であつたそれは租入の外に鑛山及び外國貿易の利得が莫大であつた、家光の時には鑛山及び貿易の收入が激減した上に出費が多かつたから前代の貯蓄に手をつけたけれども財政の基礎を動搖さすには至らなかつた、明暦大火の影響として駿府及大阪の金銀を費し、家綱の晩年には財政難が具體化した、元祿の金銀吹替は幕府財政の救濟以外に金銀座の救濟・通用金銀の增加等の原因があつた事を明確な數字から示して居るものである。「江戸時代に於ける新田開發に就て」(橋村博、歴史地理)は新田開發が幕府及諸藩の奬勵のみならず、當時の政論家の鼓吹によつて其機運を促進せし事を言ひ、且つ治水事業の結果として新田の生じたものあるを注意し、海鹵の埋立干拓及び沼澤干拓の普及は前代その比を見ざる所であるが、その開發のために農民を招致する事には最も苦心した事で、津輕藩の如きは藩士の歸農によつて居り、開墾地には鍬下年季又は徵租率低下を以てした。しかしそのために本田耕作よりも新田の賦役が輕いので本田を棄て、新田に赴くものも出來、熊澤蕃山の如き治水の爲に害ありと道破したものもある位であるけれども、新田開發の勢は終に之を止むる事能はず、就中中期以降に於ては町人の請負新田盛んとなつて後世の大地主の出現となると言へるは、「享保前後に於ける新田開發利害論」(中村孝也、歴史と地理)は山鹿素行、熊澤蕃山、太宰春台、の所論を擧げ、何れも新田開發の必要は認めながらも、實際上甚大なる弊害を伴ひ易き故に愼重に考慮した上で着手すべしといふ論に一致するものがあるといひ、三輪執齋のそれには犯罪者貧民等の救濟を兼ねて新田開發を致すべく江戸中の遊女比丘尼等をもその開發地に遣し、妻に望むものには敕して與へて定住せしむべしとする一種の社會政策的

見地からのものがあるこせるこ相關聯する所がある、それについで、當時の社會構成の各階級の經濟狀態を示したものこして次のものを一括して擧げる。

「武士階級の窮乏」(本庄榮治郎、經濟論叢)の原因は武士が貨幣經濟の中樞たる都市に集住したゝめ生活の華美こ共に、米穀經濟の上に生活の保證を有する彼等の收入は支出に伴はなくなつた。更に諸侯が財政的の窮乏を告げたので、從つて藩士の知行が削減せられた事もまた其一因である。そこでそれに對する方策こして幕府は米價調節に腐心し且つ儉約令を出したが何れも大した效果はなかつたらしい。その他には拜借金の方法及び棄捐の方法があつたけれごも、既に武士生活の根據が動搖し、家子郎黨を捨てゝ渡り奉公人を傭ふに至つては、主從の精神的聯鎖は空虛なものこなりつゝある時に於ては、終に武士階級の破綻に瀕したのは寧ろ當然であつたらうこし百姓一揆の種々相の一こして「德川時代の農民逃散」(黑正巖、經濟論叢)は卽ち農民の消極的抵抗形態の典型である。而して其逃散も初期は極めて少數の農民が一家眷屬を引具して夜陰私かに逃亡するのであるが、後期には多數の農民が白晝公然こ徒黨をなし隊伍を組みて他領へ入込み、一種の示威運動を試み、往々暴擧を伴うものこなるこし、逃散の方法は大低犧牲者も出す事も少く、其目的を達するものであるが、それは農民の逃散によりて全村の疲弊こなり財政的窮乏を告げるから武士が屈服したのであるこいふよりも、寧ろ逃亡によりて自己の秕政が曝露せらるゝ事を恐れ延いては幕府の叱責を受くる事こなるのを恐れたから、彼等の目的を達せしめて歸還を許したのであるこ思ふこ言へるこ「土佐の百姓一揆」(同氏、同誌)中最も特徵を有する池川用居の逃散を記し高知城下を去る甚だ遠き地にまで脫走して藩の役人を狼狽せしめ、終に僧侶の力によりて鎭撫したけれごも、武士の面目が全くつぶれた事例を擧げたのこ對應する事が出來る。「江州甲賀の大工仲間」(同氏、同誌)は純然たる農村に分散せる職人の團體であつて、其都市的性質を帶びざる事や、地方の行政に對して有名なる影響を與ふる事なく、禁裏及び武士の需要に應ずるものなる故に、他

の仲間組合に比して一層官廳的性質を有す。これ當時の一般株仲間と顯著なる對立をなす所以であり、又西洋的クラフトギルドとも區別の出來る所以であるとし、その仲間構成の要素は大工株であるが、これは持高株と無高株とに分れその數は一定不變である。持高株所有者に對して種々の賦役を免せらるゝ代りに建築上の奉仕を命ぜられた時には、その持高に應じて一定の金錢的給付をしなければならぬ。無高株の保持者は義務奉仕として大工の勞働を提供せねばならぬ。故に前者は大工家業を營む事を必要條件としないが、後者は大工を營まなければ、その仲間から除かれるのである。この兩者を古株と稱し寛永十二年より存するものである。その他に弟子筋が仲間入を許さるゝ事もあつて、それは新株大工と言はれ、一代限りのものである。大工仲間員は必ず當該地域の居住者に限つたものである事等を詳述してある「西陣選糸仲買仲間の研究」(澤田章、史林)は本庄榮治郎氏の「西陣研究」を批判せんとするものにして、例へば仲買仲間成立時代は本庄氏の享保十六年現在說に對して更に古く延寶天和頃に成立せしならんとし、取引機關として神樂講天神講今宮講の間に何等區別なしと斷じ、この三仲間の成立に及び、絹相場立と糸相場や織屋仲間の仲買方取引定等に就いても本庄氏の說を駁したものである〔中村〕

文學に關しては「我國古文學に就て」(幸田露伴、早稻田文學記紀文學研究號)は風土記は國々により記者を異にする爲文體に地方色のあらはれを見るとし「記紀歌謠の具象性と象徵性」(久杉潛一、同誌)は記紀歌謠の具象性は現實的眞實の中に藝術的眞實を示すものでありその象徵性は譬喩の使用に於て見られるがその譬喩は現實的感覺的なものが多く氣分情趣の象徵せられたものは殆ざない。それだけ單純强烈實感的でありその點に具象性をより强める效果を有すと說く。その他「歌謠に現はれたる上古の人文」(佐々木信綱、同誌)「記紀文學に現はれたる上代人の生命の欲求」(倉野憲司、同誌)「允恭紀の歌の一つについて」(橋本進吉、同誌)「記紀歌謠の形態を論ず」(小口麻太郎、國語と國文學)「記紀時代短歌の發展」(渡邊吉治、同誌)がある。「懷風藻の編纂者について」(川

原壽一、同誌）は從來の淡海三船說を斥けて石上宅嗣說を提唱して居る。萬葉集については「萬葉集卷十五と中臣宅守相聞に關する一考察」（平岡好正、國學院雜誌）はこの卷を中臣宅守の撰ぶ所とし「萬葉作者考」（澤潟久孝、國語國文の研究）は萬葉作者の門部王は二人あり、又石川郎女は一人なりと斷じ「萬葉の比師に關する一考察」（生田耕一、藝文）は萬葉集卷十三に見える比師は仙覺の解せる如く海中の洲であらうと云ひ「大伴家持とその相聞歌」（齋藤清衛、國語教育）は上世歌謠に見える性的要求の情緒的裸出は鑑賞美術の確立といふ天平一般の風潮を受けて戀愛の情趣化を見るに至つたが家持の相聞歌もその一例であるとし「萬葉集の性質とその文學史的意義」（森本治吉、國語と國文學）は萬葉集を發生的見地より見る時は其中に隨筆文學、物語文學、紀行文學の三形式が殆ど完成せる姿に於て含まれ又內面的に見れば單に民衆文學のみならず、個人文學の明かなる萠芽をも見得るとした。「萬葉集の次點」（武田祐吉、國學院雜誌）は天曆の古點に漏れた歌に對し次第に次點が施されたがそれは仙覺の新點に比しいまだしい所は多いにしても平安中期以降に於て此集の研究が漸く盛んになつたことを反映するものと說く。なほ「萬葉集管見と萬葉集僻案抄との關係」（大石新、國語と國文學）「萬葉集卷七考」（森本治吉、同誌）「萬葉集の心」（佐々木信綱、同誌）「萬葉集雜談」（同人心の花）がある。「王朝文學の基調」（吉澤義則、佛教美術）は平安朝初期は和歌の暗黑時代であるがこの時代を挾んで、前後の歌風が萬葉調から古今調へと一變して居る。その原因は和歌が此間に於て女子の手中に移つた爲である。かくして復活した和歌は王朝人の生命であり、藤原時代の文藝も和歌の精神によつて支配されたがその基調を示すものは古今集の和歌であり態度であるとした。「古今集刪修と萬葉集の歌」（春日政治、國語國文の研究）は現在の古今集は幾度かの刪修を經て居るがその中には萬葉集出自を理由として削られた歌もあつたとし「古今集の左註について」（安田喜代門、同誌）は此註は撰者の手に成るものではない。そして古今集が鑑賞せられ始めた頃から出來かけ大體拾遺集時代に完成したもの

で單なる備忘にすぎぬものもあるが人麿崇拜と歌の物語への展開を示すものもあるとし「宇都保物語の作者及年代に就て」(金ヶ原亮一、同誌)は此物語は冷泉圓融兩朝の頃に出た寫實小說で作者は分らぬとした。「源氏物語の若菜其他」(久松潛一、國語教育)は源氏物語は若菜卷以前は大體情の向ふまゝなる生活を寫して居るが此卷から後は理性的意志的方面が現はれそれと情との交渉が描かれて來る。この葛籐の結果あきらめの心、哀感といふべきものゝ色が濃くなり憧憬と夢とから醒めた痛ましき現實がその姿を現はしてくるとし「三條西家證本源氏物語」(山脇毅、藝文)は三條西實隆が手寫したものを底本とする所謂三條西家證本を現存の吉澤本、久原本、中院本によつて研究せるもの。なほ「源氏物語のあはれについて」(庄司米藏、國語と國文學)がある。「紫式部と大貳三位」(石村貞吉、同誌)は越後の辨と大貳三位を同一人なりとし「清少納言の閱歷と性格」(市村年、國學院雜誌)はその矛盾し複雜せる人物を說き「和泉式部傳の研究」(岡田希雄、國語國文の研究)「和泉式部と藤原保昌」(同人、歷史と地理)は共に精密な考證である。「天德歌合について」(兒山信一、心の花)は此歌合が名實共に完備せる歌合の最初のものであり、其規模は永く後世の模範になつたと說き「大鏡の著作年代と其著者」(西岡虎之助、史學雜誌)は大鏡は萬壽二年藤原能信の作で發端の雲林院菩提講は同年五月同寺で行はれた皇后娍子の御佛事をさしたので其の時集つた人達の問答を基礎として纏めあげたのが彼の三卷であるとした「金葉集考」(岡田希雄、藝文)は同集の撰進は大治三年二月から同十二月の間に行はれたと述べ「藤原重家集解說」(同人、同誌)は治承二年仁和寺宮覺性法親王の命により重家自撰して成るところがこれであるといふ。「新古今和歌集の成立に就て」(山崎敏夫、國語國文の研究)は新古今和歌集の竟宴は元久二年三月二十六日に行はれたが、其以後に於ても作品の出入甚しきものゝあつた事を考證し「藤原定家の歌風」(谷鼎、同誌)は定家は才によつて和歌を考へ意識的に歌道を變化せしめんとした。其歌は主智を出發點とし技巧に腐心しながら情趣の複雜性を求め更に象徵の域に迄達せんとしたと

云ひ「鹽谷朝業とその家集」(橋川正、歴史と地理)は佐々木信綱氏の發見にかゝる信生法師集が宇都宮頼綱の弟鹽谷朝業法名信生の作なるを指摘し坂東文化研究の有力なる史料とすべしと「正徹」(岡崎義恵、思想)は正徹の幽玄の主張を批評した。なほ「展開的に見たる源實朝の思想と藝術」(向井是義、國學院雜誌)「鎌倉時代末期の子守歌」(岡田希雄、歴史と地理)「連歌史論綱」(萩原蘿月、國語と國文學)「宗祇法師と其生涯」(小島吉雄、國語國文の研究)がある。「近松門左衛門」(草部了圓、國語國文の研究)は先づ近松の生立と各狂言の著作年代を考定し彼を以て常に觀客を相手として筆をとつた徹底的のオポチユニストとした。其他「元祿甲戌の支考」(各務虎雄、同誌)「鬼貫の俳論」(小林正治、同誌)「鬼貫の新研究」(鈴木重雅、同誌)「續鬼貫の研究」(同人、國語と國文學)「金を描いた西鶴」(小柴値一、國學院雜誌)「竹田出雲と忠臣藏の作者」(角南泰象、國語國文の研究)「丈艸研究」(市橋鐸、國學院雜誌)早稻田文學草雙紙の研究號は「黄表紙から合卷へ」(山口剛)「柳亭種彦、田舍源氏種彦著作目錄」(水谷不倒)「草雙紙とエロチシズム」(尾崎久彌)「草雙紙と浮世繪」(高安月郊)「支那文學と草双紙との交渉」(高安月郊)「支那小說と馬琴」(池田大伍)「歌舞伎小說解題」(渥美清太郎)「草雙紙旺盛期と維新後」(三品蘭溪)「草雙紙と明治初期」(野崎左文)を收めて居る。其他「八文字屋本について」(吉田澄夫、國語と國文學)「黄表紙と對象の世界」(小柴値一)がある。學術方面では「國學者の憧憬と自覺」(西尾實、國語と國文學)は古代を古代として認識することが契沖の中心動機たりしに比し東麿晩年の思想に於ては之を當爲と考へようとする傾向があり「あるべき」生活のために古代を明かにしようとする意識が著しくなつて來る。これが何よりも契沖學と東麿以後の國學とを別つ重要な點であるとした。なほ清原貞雄氏の「國學發達史」がある。「平假名の發生に就て」(吉澤義則、佛教美術)は平假名は萬葉假名が自然に草體に書き頽されたもので最初は女文字或は女手と呼ばれた事はその完成者が婦人であつたことを思はしめると云ひ「濁點源流考」(同人、國語國文の研究)は濁點はオコト點に始るが平安初期に支那の

點書に學んだ點本が出來、同時にその音訓の註を表はす爲にチコト點が發明されたとして、その發達の跡を檢し「鈴木朗の國語學史上に於ける位置について」（時枝誠記國語と國文學）はその著活語斷續譜こそ本居春庭の詞のやちまたに影響を與へたもので、それは宣長の詞の玉の緒、御國詞活用抄と富士谷成章の裝圖とを結合して出來たものであり著者鈴木朗は實に本居語學と富士谷語學との統一者なりとした。其他「平安朝の初期に於ける副詞『いと』の研究」（安田嘉代門、同誌）「平安朝初期における副詞『いと』の職分」（同人、同誌）「家持の假名管見」（高林誠一、國語國文の研究）「口語の推量助動詞『う』の發生」（土井忠生、同誌）「西鶴近松用語雜考」（佐藤鶴吉、同誌）「近世口語一斑」（松尾捨治郎、國學院雜誌）がある。「辭書と歷史研究」（松井簡治、同誌）は辭書には社會の事物が網羅されてあるから時代の社會狀態を知る手引となると說く。教育方面では「古狀型往來物の史的發達についての叙述と說明」（石川謙、倫理教育研究）は先づその種類をあげて說明し、次に古狀型が主として武家の子弟の教科書であつたこと初め消息科に屬して居たものが後に歷史科に轉じたこと及び歷史科に轉化した初めは武强本位であつたのが後に道義中心に迄移り替つたといひ「中世末期の寺院に於ける世俗教育の內容」（同人、教育論叢）は寺院での世俗教育は、その教科の性質から見て Lileral education でありそれが時と共に世俗化し實用化し來つて初等教育への飛石を舖いてくれたとし「往來物研究の教育史的理念と方法」（同人、同誌）は往來物は庶民教育の教材であり教材は教育理念の具現者であるが故に往來物の分化普及を跡づける事によつて教育理念の發展を知るといひ「大學寮學生の身分について」（高橋俊乘、龍谷大學論叢）は五位以上の子弟を收容すべかりし大學も實際の入學者は孰も身分が低かつたのは有資格者が少かつた事と共に立身の爲には大學が殆ど無效なりし爲であるとした。なほ「ちごの教育」（同人、哲學研究）がある。風俗方面では「卯杖槌弼杖の研究」（江馬務、風俗研究）はこれらは共に支那風俗に起源し後に日本化されたもので互に密接な關係を有し卯杖は又弼杖としても用ひられ三

月に粥を煮ること女の尻打なごもこれより起るとし「冠沿革論」（同人、同誌）は冠の硬化は平安初期の巾子挿入に始り延久以來の厚額に助長されたと云ひ「端午人形考」（同人、同誌）は競渡より藥獵、藥獵より競馬、競馬より騎射、騎射より藥草の兜次に木兜、武者人形具足武器といふ順序に發展し來つたと說き「衣服裏地の沿革」（同人、同誌）は原始民族の衣服は皆單で裏をつけることは比較的進步した形なりとして地質色彩等につき各時代の變遷を述べた。其他「祇園會山鉾の沿革」（若草史明、同誌）「葬式の變遷と種類」（江馬務、同誌）「紫式部日記に表はれたる服裝」（中島幸枝、同誌）「龜戸神社の行事」（宮田戊子、同誌）「吉原歲事史」（同人同誌）「江戸時代中期に於ける世相と民間容儀服飾笄の部」（江馬務、同誌）「應仁の亂後に於ける蹴鞠の遊戲的地位」（有馬敏四郎、中央史壇）「後土御門天皇時代に於ける年中行事」（同人、同誌）がある。舞曲演劇方面では「道成寺藝術の展開」（高野辰之、史學雜誌）は道成寺說話は平安朝にその姿を現し熊野參詣の盛なりし鎌倉時代に固定されたもので道成寺緣起は古くは賢學の草子に導かれ更に溯つては華嚴緣起義湘傳說を粉本として作製せられたものである。現存道成寺緣起は應永三十四年の作で事件のあつたとせらるゝ延長六年はこれより五百年を溯らせたものである。又奧州の僧安珍とあるはその地方に於ける熊野信仰の盛行を反映するものである。この說話を淨瑠璃が採用したのは用明天皇職人鑑を初とするが遂に京鹿子娘道成寺を生むに至つたそれは元來深い宗敎的意義を有する話を次第に甘く陽氣な娛樂本位のものとしてしまつたのであるとし「方々の田樂」（岩橋小彌太、心の花）「遺された田樂」（同人、風俗研究）は平安朝の田樂は一種の群集舞踏であつたが縉紳の弄ぶ所となつて綾羅錦繡を纏ふに至り田樂法師の手に入て職業化し猿樂の影響を受けて種々の曲藝を交へ且亂舞藝能等を加へて漸く演劇的性質を帶ぶるに至つたとし各地方に遺存せる田樂の現狀を紹介す。其他創始時代の平家の琵琶と覺一檢校」（後藤丹治、歷史地理）「初期の平曲に關する研究」（同人、國語と國文學）「觀世初三代考」（市川寬、國語國文の研究）は觀世が伊賀山田の出身なりと

する說を支持し、初三代の事蹟を說いて居る。早稻田文學には南北と默阿彌號がある。「南北以後默阿彌以前」(渥美淸太郎)は俵勝藏、三升屋二三次、中村重助、松本幸二、篠田金次、五世鶴屋南北、三世櫻田治助三世瀨川如皐の各作品の簡單な解題であり「私の南北觀」(池田大伍)は南北の悲劇には一脈の滑稽的天分が流れて居るとし「五瓶南北とその時代」(近藤忠義)は五瓶は上方狂言の形式的方面に最後の整理と完成を與へ南北は江戸狂言の內容的方面に最後の飛躍と展望とを與へて居るとし「默阿彌の世話物三十種」(岡本綺堂)は默阿彌は惡の讃美者に非ずその描く所の惡人は寧ろ善の分子をより多く含むとした。その他「四谷怪談作者としての南北」(畑耕一)「愛の人默阿彌」(守隨憲治)「鶴屋南北と其作風」(沼波守)等を收めて居る。美術建築方面では「平安朝の藝術に關する一考察」(三浦周行、佛敎美術、藤原時代の藝術號)は藝術の發展は必しも政治のそれと併行せざる事及僅少なる傑作は必しも時代全般の風尙を代表せざる事を說き天平藝術は盛唐藝術の模倣に發源し弘仁貞觀はその延長と見るべきであり藤原時代藝術の日本化的傾向の原因を日唐交通の杜絕に歸するのは正當でなく寧ろ日本內部社會が固定し職業世襲の風が起つた爲支那風の豪放雄壯な力を失ふに至つたのであるとし鎌倉期の藝術が雄健なのも東大寺大佛殿の再建に伴ふ宋藝術家の活躍と盛唐の感化を受けし天平遺品の修理の結果と見るべしと說き「藤原美術の社會的背景」(西田直二郎、同誌)は藤原時代は女性的社會の出現として日本歷史が有する唯一の時期であり、そこでは女性的世界觀が社會を支配したが彼等は更により尊き世界を有つて居た。卽此の世と彼の世とが肅然として對立せる世界である。その他界は又地獄極樂の對立せる世界でありそれを明らかに意識する事の出來たものは貴族であつた。彼等はその世界を繪畫彫刻により現實の姿に造り立てんとしたがその內容に於ては有閑階級意識の究極たる女性的なものを多量に有した。そして更に具體的にこの世界の對立を示すものは寺院である。其處では內外の相違が明かにこの世界を區別するが故に彼等は好んで第二の世界を寺院に模寫しそこに安住した

又此の時代に於ける政治社會の構造を前代と分つものは私的關係の發展である公の賦課は變じて私的貢献となつた。その中に注意すべきは捧物でありそれは善美を競ふ機構として進んだ。同一の心理が堂塔の成功に見られるその功德は佛國の實現にあるが同時に福利を願ふ心もあるかゝる時代の美術が眼を惹くもの刺戟的な感覺的なものであり工藝品的裝飾的なものであるのは自然である。

「扇面寫經」(源豐宗、同誌)は扇面が畫面として利用されたこと、寫經の盛んなりしこと經典書寫に藝術的意匠を加ふる風のありしことこれらが原因となりて扇面寫經を生ぜしことを述べ各葉の圖柄描法等を說明しその奉納者を八條女院に比定して居る「藤原時代の染織に就て」(明石染人、同誌)其時代に於ける染織の制度織物の種類及模樣染と染色等の研究であり「藤原彫刻の諸問題」(源豐宗、同誌)は同時代彫刻の特徵を以て平面性、明瞭性優美性に在りとし彫刻史上の藤原時代の上限を花山一條の御代に擬して居る「大和繪肖像畫に就て」(熊谷宣夫國華)は鎌倉時代以前の肖像畫は宗敎的意義に立脚して製

作され像主も概ね佛敎關係に眼られて居る爲に寫實的要求の實現は不可能であり專ら普遍的な宗敎的約束の支配の下に描かれたのであるが鎌倉時代に至つて漸く寫實的肖像畫の出現を見た。それは一般文化に於ける人間性の增大と非宗敎藝術としての大和繪の發達に負ふものでその肖像畫は形而下的要求を主とし構圖は直觀的形式に終始して居るとし「雪舟と其入明」(瀧精一、同誌)は雪舟が日本繪畫史上に有する意義は漢畫を自然化した點にありとしそれと入明修業との關係を說く「古歌舞伎繪」(高野辰之、中央美術)は古歌舞伎繪中阿國を寫して十字架を帶ばしめたるものゝ存するのは當時に於ける一種の流行で女歌舞伎連が人目を惹く爲に用ひしならんと云ひ「德川時代の京阪の銅版家」(西村貞、同誌)は德川時代の銅版畫家は關東の司馬江漢、田善等によつて代表される樣に思はれて居るが關西にも同時代に一派の銅版家あり、蘭療藥解の附圖は山口素絢の手に成ると推せられ又中屋伊三郎は解剖圖譜、醫範提綱等の附圖を描いたといふ。「草双紙に於ける歌川派の繪」(水谷不倒、早稻田文學)は

初代豊國、敵討物と豊廣、豊秀と朝妻舟、合卷と豊國、國貞と似顔繪、等の各項を研究した。「芳崖雅邦を論ず」（瀧精一、國華）は兩人共に客觀的理想主義なりと論じてゐる。其他「法隆寺四天王と七星劍」（松本榮一、國華）「平安朝の屏風畫と大和畫」（尾崎夏彦、同誌）「信貴山緣起畫卷に就て」（同人、同誌）「十二因緣繪卷に就て」（松本二千里、同誌）「平治合戰繪卷の研究」（松岡映丘、中央美術）「木原古陶略誌」（志方虹影、同誌）がある。「圖式伽藍解析法による山田寺草創伽藍復原私考」（服部勝吉、歴史と地理）は解析法の根本は $\sqrt{2}$ 矩形の解析にあり山田寺伽藍趾は現尺九寸八分の唐尺が單位に用ひられ規準線長二百四十尺を以て所謂誘導矩形法によつてその大體骨子の點を完全に解析し得とし「平安時代の阿彌陀堂建築」（天沼俊一、佛教美術）は先づ形式及細部の一般的特徴をあげ次に實例として平等院鳳凰堂法界寺阿彌陀堂、中尊寺金色堂、白水阿彌陀堂、高藏寺阿彌陀堂、富貴寺本堂、淨瑠璃寺本堂を說明して居る。「古寺院の僧房及び雜舍」（竹島寛、歴史地理）は僧房、大衆院屋、政所、温室、藏院等の名稱大きさ、數、配置、構造を述べ「花頭窓と花狹間」（天沼俊一、歴史と地理）は我國花頭拱を支那傳來とし更にその起源を回教建築に迄溯らせたもの、「寢殿造りの研究」（前田松韻、建築雜誌）は寢殿とは我國古來の風習と唐時代の殿舍の名稱とを混和して生ぜる稱呼であるとしてその構造の沿革を說き「十輪院石佛龕に就て」（岸熊吉、同誌）はこの龕は十王經出現以後のもので手法上鎌倉初期と推定すべく周密なる着想に基く構造を推賞すべしとした。其他「建築史研究斷片」（牧野正巳、同誌）「岩國錦帶橋に就て」（平澤鄕男、同誌）「岡山城に就て」（仁科章夫、同誌）「過渡期に於ける住宅平面圖及び其の成形狀態の沿革的研究」（前田松韻、同誌）「伽藍配置意匠に關する圖式解析法に就いて」（服部勝吉、建築學研究）「觀世音寺研究」（福山敏男、同誌）「京都府下の特別保護建造物」（坂谷良之進、同誌）「新に指定されたる京都府の特建」（同人、歴史と地理）がある。外山英策氏の「源氏物語と日本庭園」は源氏物語に於ける庭園描寫を研究しそれより日本庭園の發達を考察せ

るものである。〔肥後〕

宗教方面では佛教史に關するものでは「日韓古代佛教の一考察」(三品彰英、歴史と地理)は先づ佛教渡來以前の日韓民族及び國家の文化發達程度並に信仰生活の狀態を述べ次に佛教渡來に就ては高麗と百濟とでは別に問題を起さなかつたが日本と新羅とでは事件を起した。けれども夫は遂に固有信仰と融和した、之には二つの方面卽ち信仰の類似と時勢の要求といふ事から考ふべきであると云ひ、「佛教と天體崇拜」(赤堀又次郎、中央史壇)は佛教中には天體崇拜が混じてゐる、虛空藏菩薩といふのは金星で之を祀つた社は我國に多い、東大寺金堂本尊の脇侍に其像がある、又國分寺の本尊の脇侍にも夫があつたと思はれる。斯くの如くして虛空藏が早く海內各地に廣まつた、又北極星北斗星によりて妙見菩薩如意輪觀音等が現はれる之を祀つた所は極めて多く、古いものでは法隆寺の東院夢殿があるといひ「佛教渡來より天智天皇末年に至る正史に見えたる佛像に就て」(石崎達二、佛教研究)は主として日本紀に出てゐる佛像につき夫が何佛の像で

何處に安置され、如何なる變遷を經たかに就て述べ「わが初期佛教と人名」(橋川正、史學雜誌)は白雉五年に宮の首阿彌陀といふ人名があるのを初めとして此種の名を附ける事は相當盛んであつた如く、神護景雲二年五月の勅には姓に佛菩薩賢聖の號を用ゐる事を禁じられた。此の流行は支那の風を傳へたものと思はれると云ひ「馬鳴信仰と養蠶機織」(同人、史林)は太秦廣隆寺に鎌倉時代の作と思はれる木造馬鳴像がある、之が秦氏の祖像と共に安置されてゐた事は馬鳴信仰と養蠶機織とが結合された事を證し又靜岡縣服織村建穗神社はもと馬鳴明神と稱せられ鎌倉時代に此信仰があつた事を示す。之は支那の民俗で馬と蠶とが關係有つた所へ佛教の感化が及んで馬と馬鳴と結合し終に蠶神とされたものゝ如く、此信仰は晩くとも鎌倉時代に我國にも流行してゐたと述べ「我國古代に於ける僧侶の生活法に就て」(荒木良仙、中外日報)は上古の僧侶は食料被服其他生活必要品は悉く國家から支給されてゐたとて僧供料及び其調進法等に就て述べ「本朝聲明沿革小觀」(大山公淳、宗教研究)は、我國の

聲明は傳教を祖とするものと弘法を祖とするものとあり前者は大原流となりて現今に及び後者は久安元年に三流と定めたが其内の進流のみ現代に傳はつてゐるとて其の沿革を述べ「上東門院の假名御願文」（西岡虎之助、歴史と地理）は門院が御自筆法華經を首楞嚴院如法堂に納められた際の御願文に就て述べ、夫に現はれたる女院の御信仰は彌勒淨土を欣び給ふのであつて御寫經の功德により君主及人民の平安を期せられると共に廣く衆生を濟度せん事を希はれてゐるのは大國母たるにふさはしいとて門院の宗教的御生活に言及し此御願文は假名が公式の物に用ゐられる素地をなしたものとして注意すべきであると云ひ「淨土教に顯れたる貴族と庶民」（西光義遵、龍谷大學論叢）は寓宗の狀態より獨立宗となるまでの淨土教に顯れたる夫を考察し、往生の行業、淨教の分布、各地で弘教に盡した聖の事等を說き、貴族の淨土教を地方及庶民に宣布した仲介者は國司と武士とであつたと述べ「鎌倉時代に於ける宗教改革の問題」（松本彦次郎、史學雜誌）は日本に於ける宗教改革の問題は道德的見地のみで論ずる事は誤りである。新教徒は舊教徒の道德的行爲を非難して之を宗教改革の口實とはしなかつた。新宗教は一般國民に宗教的自覺を促す事に大なる目的を置いた。又舊教に比しては自由思想であつたが平安朝以來の傳統的精神を尊ばねばならなかつた。隨つて新宗教は創成といふよりも復興の形をとらざるを得なかつた。多數民を教化する新宗教は日本語に氣を付けて國語と說教とを重要視した。舊宗教派は新宗教派と戰ふ際には思想戰と共に腕力戰をも行つた。新宗教派は其の壓迫に堪へ乍ら舊宗教の思想の批判を怠らなかつた。新宗教の與へた影響は各宗派が競爭し乍らも互に反對の宗教の教義を學んだ事で他の宗教を攻擊し乍ら內實には妥協を欲してゐた事であると說き「臨濟禪と中世文明」（三浦周行、禪宗）は鎌倉足利の所謂中世期の佛教圖書繪畫等を見ると禪宗殊に臨濟派關係の物が最も多い。當時は臨濟派が盛であつて高級な學問教養のある人といへば僧侶に限り殊に臨濟僧に夫が多く、外交貿易方面にも關係し又出版彫刻建築等の方面から見ても臨濟禪は中世文明に多大の寄與をしてゐる。

併し朱子學に造詣深くして却つて大義名分の何たるを知らなかつた過もあるが宋明文化を輸入したのは全く臨濟僧であつて、中世文明は何れの方面を見ても臨濟僧の寄與を閑却する事は出來ぬと述べ「室町時代に於ける朝廷と法華宗」(淺野長武、史學雜誌)は此時代初期に日蓮宗徒が京都に弘法し朝廷に接近し奉らうとする事は彼等畢生の目的であつて之を實現したのは日像であつた。次いで日靜日什が京師に弘法した結果朝廷と其宗との關係は漸く密接ならんとした。其後洛中の同宗寺院が或は自立し或は自滅した事は遇然にも寺院と公家との間に連絡を見るに至り應仁亂後は朝廷との深き緣故が結ばれるやうになつた。一面公家にも此宗を好まぬ者もあつた。夫は此宗と公家との感情が相容れない所があるにも依らうが又當時淨土宗が公家の間に盛であつた事も考へねばならぬと述べ。「一向一揆史考」(淺野研眞、現代佛教)は同一揆の顚末を記し要するに中世は武家時代であつたと共に社寺中心時代で此一揆は中世的環境の所產であつて其動機は勿論宗教的なものであつたが其基礎には常に政治的

經濟的動因があつたのであると說き「江戶時代社寺行政の一局面」(渡邊多仲、歷史と地理)は延寶頃丹波國日置八幡社が本寺寂靜院から離れて觀智院の末寺となつたが夫は前年の宗門改が動機となり打算上か行つた事であると述べ「出定後語を讀む」(加藤精神、大正大學々報)は本書には時代錯誤の引證曲解せる引證、誤解せる引證、讀者を愚弄せる引證虛僞の引證あり又明文を無視せる獨斷あり、研究の餘地ある斷定少くないと說き「出定笑語を讀む」(岡本隆男、中外日報)は本書を讀んで敬服する所は篤胤の學究的態度の眞摯なる事であるが遺憾に思ふ所は彼が破邪顯正に急にして神道の宗教的價値を吾人に示さない事と彼の廢佛論に矛盾撞著ある事である、が彼の思想は維新前後の宗教騷亂の强い伏因を爲した事に於て明治宗教思想史の第一頁に意義ある地位を占めるものであると說き、其他「原始眞宗教團の動搖初期の祕事法門及び異解」(寺西慧然、中外日報)「本願寺時代の大坂」(岩橋小彌太、歷史と地理)「駿府に於ける眞言論義」(水原堯榮、六大新報)「虛無僧私考」(一月杜鵑、密宗學報)「三業惑亂の研究」(新

道高明、眞宗學報）「明治大正時代の佛教と將來の觀測」（土屋詮教、現代佛教）等がある。寺院に就ては「斑鳩寺法隆學問寺別寺說に就ての一考察」（秋山義一、史學雜誌）は黑川博士の別寺說は不充分であるとし、日本紀、法隆寺伽藍緣起並流記資財帳等の文獻及び遺跡上より考究して兩寺は別寺なりと論じ「大雲經寺と國分寺」（矢吹慶輝、宗教研究）は我國の國分寺は武周朝の大雲經寺の模倣であらうとて兩寺を比較し又玄宗朝の開元寺の事にも論及してゐる。僧傳に就ては「弘法大師と禪」（長谷部隆諦、密宗學報）は我國にて獨立せる禪刹に唐の禪僧が禪を唱へたのは檀林寺を以て始とす、夫は弘法大師の舉達に基づくものであるといひ「大師の禪傳と無住國師」（村上素道同誌）は近來禪家の著述には弘法大師は北宗禪を傳へた如く書いてゐるが夫は誤りで、無住國師の聖財集には大師は南宗禪を傳へたとあつて北宗說よりも一層日本禪と親みがあるといひ「永觀律師に就て」（西光義遵、龍谷大學論叢）は律師の略傳を叙したる後、其著書往生拾因により彼の念佛宗を觀、夫が教團を成すに至らなかつたのは一は時代思潮にもより、又彼の思想が獨立してゐなかつたにもよると述べ「再び法然聖人繪に就て」（井川定慶、史林）は知恩院の弘願本聖人繪と、川崎家及び東京博物館に藏せられてゐる類本とを比較し、弘願本は嘉禎の躭空法然上人傳法繪を基として作られたもので拾遺古德傳、本朝祖師傳記繪詞等とは同類本で、法然上人行狀畫圖四十八卷の類本と對立するもので他傳に脫漏改竄された幾多の材料を收めてゐる點に價値を認めるといひ「川崎男爵家藏の法然聖人繪に就て」（江藤徵英、中外日報）は知恩院の弘願本聖人繪は川崎家の上人繪傳の殘缺である事を發見したとて其概略を紹介し「本願寺系圖と尊卑分脈の原形に就て」（中澤見明、龍谷大學論叢）は本願寺には享祿元年書寫の一片の日野系圖がある。之は現存本願寺系圖の最古の物たる天文五年の系圖作製の準備として分脈中から寫し取つたものであらう。然るに現流布本分脈にある如き本願寺系のものは此の享祿書寫本中には一人も記されてゐない事より、分脈に見える範宴以後の系圖は天文五年以後に本願寺から出た系圖によつて書加えられ

たものであらうと云ひ「いやおむな考」（藤原猶雪、史學雜誌）は親鸞の女彌女は元仁元年常陸で生れ、嘉禎二三年頃日野廣綱の妾となり、寛元元年夫に死別後間もなく照阿に召使はれ、ひんかしの女房に仕へたのは正嘉二年に終りし如く其後上洛して居所もなき生活を送つたもので禪念との結婚は四十一二歳の時で四十三歳に唯善を生んだ事は疑ないといひ「一山國師の來化と其影響」（木宮泰彦禪宗）は來朝以來鎌倉京都に法筵を張る事凡二十年、其間精神界に及ぼした影響の著しかつたは勿論、弘安以來殆ど杜絶した支那留學が再び盛となり又文學書道繪畫等にも大なる刺戟を與へたと述べ「一休宗純と時代」（牧野信之助、歴史と地理）は狂雲二集に見えたる當時の世相、彼の所懷を記し、時代殊に自門の腐敗を痛罵した彼は晩年に彌々狂態を增した。併し人として一面其眞面目を示してゐる、集中最も彼の嚴肅な態度に打たれるのは其師華叟に對するものである。又彼の題詠には女性を取扱つた物が多く、近侍した女性は兩三人以上あつた、夫等に關する詩篇は愛雀を葬る偈と共に彼の人としての純情を示すものであると說き「文鏡祕府論箋に就て」（內藤湖南高野山時報）は弘法大師の文鏡祕府論は德川時代に民間に多くの漢學者が出たけれども之を研究した人が無かつた。然るに寛延年間に寂した維寶阿闍梨は之を研究して箋註十八卷を書いた。之は著者が博學であつたと同時に當時の高野山が如何に學問に全盛であり又其力が如何に偉大であつたかゞわかると述べ、其他「傳教大師」（ビ・ベツォールド、中央佛教）「性靈集を讀みて」（赤堀又次郎、中央史壇）「空也上人光勝」（橋川正、歴史地理）「大僧正行尊と其の歌」（服部如實、密宗學報）「法身國師のこと」（鳥谷部陽太郎、東洋）「教育者より見たる圓鑑國師」（澤柳政太郎、禪宗）「宗義史上に於ける杲寶師の位置」（松本隆、密宗學報）「寶性院政遍と德川家康」（上田進城、同誌）「聖乞食月僊上人」（江藤澂英、禪宗）「興正寺攝信上人」（谷本富、中外日報）「忠誠の人攝信上人」（北峰順修、同誌）等がある。神祇史に關するものでは「上代史上に於ける大山祇神の位置」（村田正志、國學院雜誌）は大山祇神は山神であるとするのは誤りで山津見といふ團體若しくは種

族の代表神と解すべきで、山津見は山陰、九州南部に據り海外との交通で常に新文化を入れ其族は次第に發展して到る所の海に根據を据えてゐたと說き「綿津見と海神綿津見と三筒男並宗像三女神（川本達、歷史地理）は綿津見と海神とは別神、綿津見と三筒男命とも別神、又宗像三女神はもと一體三神で三津綿津見神、三筒之男命と異ると述べ「海神國海神宮に就て」（同人、中央史壇）は海神國は宗藩、海神宮は津島の仁位の海宮山であるとして「古代神道に於ける自然的要素」（デ・シ・ホルトム、東亞の光）は神道は自然崇拜と祖先崇拜とに大別される內原始人の自然に對する驚異、彼等の生活と自然とに就て考察し「神道の特殊性と普遍性」（加藤玄智、日本教育）は神道には日本固有の敎たるべき方面と總ての人類に共通な敎とする方面とがある、前者は神道の特殊性、後者は世界的普遍性であつて、此兩者は何れも失つてはならぬものであると說き「紀記神話の四源流と其の結合」（田中治吾平、中央史壇）は上代には生殖崇拜太陽崇拜人靈崇拜龍蛇崇拜の四信仰があつて紀記當時には是等が競爭し遂に人靈崇拜が勝ちて神道と成つた。此の人靈崇拜は一面太陽崇拜と結合して天照太神となり一面には產靈神と結合し夫が又太神に結合し太神の御子孫たる皇室が四源流の信仰を持てる種族を結合されたと傳へたのが我國の古傳說であるとし「禊祓に關する研究」（植木直一郎、社會學雜誌）は禊祓は神に除災を乞ふ詞を申す外に方術をも行ひ又神へ供物、司祭者へ贈品をした。之は後に贖罪的賠償の性質を有するに至つた。殊に他働的に除災を行ふ場合には君主、權力者が物を收得し又身體的苦責をも加へた。斯くて宗敎的制裁は漸次法律的制裁となつたと說き「我國古代の日祭氏族につきて」（田中治吾平、中央史壇）は日祈氏、それと同一らしい日奉氏、及び日置氏日置神社、日置の地名等に就て述べ「氏神と祖神との關係についての管見」（魚澄惣五郎、龍谷大學論叢）は古代氏族の崇敬した神社は一族の守護神とも稱すべきもので必しも其氏の祖神ではない。氏神が其氏の祖神である場合もあるが然らざる場合が頗る多い。少くとも古代に於ては敬神といふ事には必しも崇祖の觀念が伴つてゐない。敬神卽崇祖の意味に

なつたのは民族の發展した後の事であるこ說き「氏族制時代の神社祭祀」(植木直一郎、國學院雜誌)は氏族制、氏上祭祀權、祖神氏神の事を述べたる後祭祀の意義及效果を論じ、夫は宗教的感情を滿足し團結體の求心力こなり公共的義務感を促養し民族性を陶冶すこ說き又祀職の世襲に就ても述べる所あり「巫の一考察」(佐々木降美、歷史地理)は支那に吉く巫祝の名がある。之は神を和め、禱り、齋いだ外更に降神の對象物であつた事に大なる意義がある。彼等が託宣を下し又祭場を指定する事が神社を起す原動力であり而して必然彼等は古代の政治を左右する力を有した。又巫女が遊女の一部を形成したこ說き「本地垂跡說の適用こ神々の觀念の變動」(竹岡勝也、思想)は垂跡思想により一々の神の本地佛を定めるやうになつたのは平安朝中期の後半で、神佛一體の觀念に到達したのである。而して神々が衆生濟度を願ふこいふやうになつたのは神の觀念上の大革命である。斯くて神々の觀念は次第に佛菩薩により征服されたが一方では又和光同塵である事によつて神こ佛こを區別する思想もあつた。

之は佛教解放運動に到達する上に大なる意義を持つものである。他面には又佛教この關係に基づく惡神の觀念も現れて來た。卽ち天狗の信仰であつて之が惡神の觀念を統一し天狗こ神々この對立が語られるやうになつた事は神の觀念の發達上見逃す事の出來ぬ現象であるこ說き、「林羅山の神道說」(田中義能、東亞の光)は彼の神道に對する思想の根柢は儒教的のもので支那人の糟粕を嘗めたものであるこいひ「隱れたる日本のメシア教」(石橋智信宗教研究)は文政九年に死んだきの女が教祖である無名の宗教はメシア教に似てゐるこて夫を紹介し「明治初年に於ける神道運動の特色」(河野省三、國學院雜誌)は宣傳の盛んであつた事、抱負の大きかつた事幽冥觀の深かつた事であるこし、其他「荒御魂之恐」(ボンソンビ・リチャド、歷史こ地理)「穀物神の祭祀こ風習」(中島悅次、中央史壇)「飛鳥奈良時代の佛神關係」(高橋俊乘、龍谷大學論叢)「淨土教史上に於ける神祇の問題」(西光義遵、同誌)「石田梅巖の神佛一教觀」(藤原了然、同誌)「維新以後の神佛關係の變遷」(寺本慧達、同誌)等がある。神社神職に

就ては「兵主神社の分布と投馬國」(橋川正、歴史と地理)は延喜式所載の兵主神社は十六社で其分布は大和二和泉一三河一近江二播磨二壹岐一丹波一但馬四因幡二で特に但馬に四社ある事は此地方に於ける外來文化の繁榮を示し魏志倭人傳にある投馬國は但馬であらうといひ「諏訪湖の御渡と諏訪神社」(三上左明、同誌)は諏訪上下社は初は何等關係なく湖の南北に鎭座したものであつたが、所謂御渡現象により兩社祭神は夫婦と考へられるに至つたものと思ふといひ「總社に關する一考察」(宮地直一、史學雜誌)は主として常陸總社文書により總社の造營には國衙官人が關與し又總社と諸社との關係は祭祀系統の慣習を主とする外經濟關係に基づく風習があつた。又正和頃の常陸總社は造營に際し義務を課する如き大事には幕命を仰いだ外、國家大事の御祈にも守護を通じて其命を承けたが、平素の行事も武家監視の下に立つた。併し國衙との關係は以前と渝らず頗る密であつた。斯の如きは當國のみではなく且つ王代からの流例と思ふ。國衙の勢力が失墜した後にも武家の聲援を得て一宮と並ぶ重要性には動きを見なかつたと說き「神職の離檀問題に就いて」(辻善之助、同誌)は神職が離檀して自分で神葬祭をやりたいと願ひ出たのは諸家祕聞集に出てゐるもので最も早いのが天明五年で、寺社奉行は之に對し吉田家から神葬祭の免狀を得たならば其の當人及び嫡子は其寺の宗門を離れて神葬祭を執行してもよい、他の家內は不可であると指令した。之は幕府の通じて行つた方針であつたらしい。併し之には困難な事情があつて容易に實行出來なかつたらしい。檀那としての神官が檀那寺の爲に非常に壓迫を受けて居た事は明治となつて神佛分離が容易に行はれた一原因である。此の神職離檀の起因は江戸時代の初から崩して居つた復古思想に基づくものであると說き、其他「延喜式と神社制度」(宮地直一、國學院雜誌)亦見るべきである。基督教史に關するものでは「宗門人別改制度の沿革」(菊田太郎、經濟論叢)は此制度は島原亂前後に起り寛文延寶頃にほゞ完成し維新後戸籍法の實施と共に廢絕した制度で最初は基督教禁止浪人取締を主たる目的としたが完成後は戸籍人口狀況を明にし民政の一助と

なす爲に繼續されたと述べ「豐後國の宗門改に關する一考察」(宮地直一、歷史と地理)は寛文頃に於ける此國の基督教徒搜索に就て記述したものである。信仰に關するものには「本邦古代人の懺悔心に就て」(川口元亮、國學院雜誌)は古代人は罪惡の永久的防止に關し神に謝する懺悔を力說したが之は宗教的儀禮としてのみではなく、日常生活と結付いてゐた事に特殊の意義があるといひ「貴種誕生と產湯の信仰と」(折口信夫、同誌)は貴種の誕生卽みあれといふ語は現れる義なる事、古い時代御產の形式には水と火との二方式有つた事、貴人をとりみる家を壬生といひ之は丹生の水神信仰と結付いたものなる事、產湯は禊であるが其れは特別の水と看做された事等を說き「地藏菩薩信仰史」(桂義雷、密宗學報)は奈良朝に初めて此菩薩像が現はれ、夫が獨立尊として信仰さるゝに至つたは平安初期の弘法の密教請來傳道に依る。かくて江戶時代には其信仰の黃金時代を現出したといひ、其他「我が國民の信仰心と尙武の精神」(大森金五郎、歷史地理)などがある。思想に關しては「平安朝末期の民間思想に

就て」(藤直幹、歷史と地理)は當時の貴族は未來極樂往生を願ふために對し平民は現世の幸福を願ふた。此事は國民思想研究上重大な意味を持つ。又此時代の人心を支配したものに物忌の思想がある。貴族は之を恐れたが民間では之を憚らぬ風があつた。平民は貴族の消極的な生活に反し積極的な生活を營んでゐた。此二つの思想中の後者が後に武士道精神となつたのであると說き「聖門所藏四王寺印考」(中村直勝、藝文)は之は秋田城內の四王寺が用ひたもので此寺は同城が出來た奈良朝に建てられたものであらう。但し此印は平安末か鎌倉初期の物であらう。之は寺印であつたのみでなく秋田祭の本尊として崇拜された。印を神として崇拜する思想は密教で印信を與へ又政治上の文書は印を捺す事により效力を生ずるといふ宗教上と政治上の兩思想が合して印を神聖なものとするに至つたものであらう。今の秋田縣古四王神社は此印と深い因緣があつて或る時期の御神體であつたかも知れぬと述べ、「現代思想と國民道德」(深作安文、國學院雜誌)は此の兩者を如何に融和さすべきかを論じ夫は個人を純化して人

格主義に到達し、夫を實行主義として社會に生きればよいのであると說いてゐる。〔松野〕

最後に史料に關するものとして記すべきは第一に「古典研究」(植木直一郎)であるが、その中に於て神典としての記紀二典を論じ記紀古鈔本及び記紀刊行の比較を試みて二典の古鈔本刊本を列擧せるは大に記紀研究者に裨益する事であらうし、異本の發生に無意的變改と有意的變改とある事を注意し、古典研究家はその點に留意せざるべからざる所以を力說して居る。大阪毎日新聞社が印刷せる祕籍大觀としての日本書紀古寫本の出版は完成し、「古寫本日本書紀解題」を添へた事もこの項に記すべきであらうか。少しく問題は違つて居るけれども、法隆寺再建非再建論が再燃した際に財團法人聖德太子奉讚會が「法隆寺論抄」を發行した事も極めて意義のある企圖と言ふべきであらう。天文日記を主として研究して「本願寺時代の大阪」(岩橋小彌太、歷史と地理)を見、寺內は西町、南町、北町、淸水町、檜物屋町、新屋敷の六箇町から成り外郭を堀と土居とで固め、町と町との間は塀・釘貫があり、各町には櫓、番屋があつた。寺內の行政については十六番匠なるものがあつて一種の自治があつたとしたものがある事は昨年度に於ける特色ある出版として「浪華叢書」の發行せられ既に攝陽奇觀、攝津名所圖會大成、蘆分船・難波鑑以下の地誌、街能噂・虛實柳巷方言・煙華漫筆等の風俗書、浪花其末葉・戲場樂屋圖會・大歌舞伎外題年鑑の如き演藝關係圖書等全十六册の內八册の刊行を了せる事と併記して置きたい。

昨年の出版界は、思ひがけなき文藝書の一圓本發行に刺戟せられて、空前の盛況を來し、その結果各種の全集ものや叢書ものが續出し、讀書子を悅ばしめると同時に泣かしめたものであつた。それ故にその全般に亙つて記す事は殆んど不可能の事であるから、僅かに遇目したものだけを示すに止めたいと思ふが、先づ前々年より引續いて刊行され來つたものから言へば「增補本居宣長全集」「傳敎大師全集」「近世社會經濟叢書」「日本古典全集(第一期)」は刊行を完了したし「異國叢書」「鼎軒田口卯吉全集」「明治文化全集」「海舟全集」「海表叢書」「賀茂眞淵全

集』『新注皇學叢書』『日本隨筆大成』『日本隨筆全集』『日本古典全集(第二期)』は新に刊行を始めて次年度に持ち越したし、「續群書類從」は僅かに七八冊を殘して完了に近いた。古典保存會が「醍醐寺本遊仙窟」「醍醐寺本元興寺緣起」『打聞集』『色葉字類抄』を、史料編纂掛が古簡集影の一部として「猪熊本朝野群載」を、「古文書時代鑑續編(上)」を出したのは何れも玻璃版利用の同類項の中に入れて置く。その史料編纂掛は「大日本史料」では第三編之一、第五編之六、第六編之廿三、第八編之十二、第十一編之一、第十二編之廿七を「大日本古文書」の方では正倉院文書の第十六、家わけ第十一、小早川家文書之一、幕末外交關係文書附錄四を、「史料綜覽」では卷四を出した。また「神祇志料(上、下)」『神祇志料附考(上、下)」や、「靜寛院宮御日記(上、下)」が皇朝祕笈刊行會から發兌された事と「法制史料古文書類纂」(瀧川政治郎)が印行された事とは、特に著しい收穫であらう(「中村」)

朝鮮史　昨昭和二年度斯界の趨勢を七項に分つて見ると、先づ一般的研究には「滿洲民族を顧みて」(稻葉君山、朝鮮)肅愼氏より渤海國の興亡までを總論し、震國の國號が易經の思想に出でたることより女眞滿洲族の活躍、康熙帝の偉業、入婚政治の眞相、封禁地、國語問題に及ぶあり。「朝鮮文化の變遷に就て」(大原利武、同誌)總論したのもあるが、特種問題研究は最も多量で、「朝鮮醫藥史料」(今村鞆、同誌)は高麗文宗三十三年に宋の神宗より藥劑を乞ひ得たる始末を述べ、「藥飯と烏崇拜」(同人、同誌)は支那の八寶飯に當る藥飯が新羅二十一代毘處王十年以來烏のトーテムを傳說化せし說話に起原したるを謂ひたるは「朝鮮綿布史」(稅田谷五郎、同誌)と共に興味深い。「日韓古代佛教の一考察」(三品彰英、歷史と地理)は朝鮮古代に祭政一致の行はれたる名殘を尊長に對する稱號に留めて南解次々雄と稱せしことを提唱し佛教が韓半島に流傳されて以來一面には固有宗教が充分完成されざりし爲シャーマニズムが佛教と融合し、他面國家國民を一致せしむる外敵國難の問題と結びて新羅武烈、文武兩王の三國統一と共に佛教が宗教的に國家を統一するに貢献したるならむを唱へ、「高麗高宗朝及び元宗朝の

倭寇」(青山公亮、史學雜誌)は所謂進奉船が十一世紀の後半より起り高麗が之に對して拒絶態度をとりし爲倭寇を化せしめたもので、高宗の十年以來十四年までは金州地方に出沒し、其の後の高麗は禁賊交渉と入寇防備とを併せ行ひたり、但し元の日本征伐に助兵を出だせしは決して倭寇の禍害の報復手段としてゞはなかつたものであると斷じ、「朝鮮の領土問題民族問題及鮮滿文化關係に就て」(稻葉岩吉、朝鮮)は夫餘神話の卵生の傳說より滿鮮關係の史實考察の必要と鮮人の傳統思想の謬見を匡正する必要あるを論じ、「李朝の法典」(麻生武龜、同誌)は經濟六典經國典經國六典の編纂の始末を考へたるもので、「朝鮮人の漂流記に現れた尙眞王卽位當時の南島」(伊波普猷、史學雜誌)は成宗實錄卷百〇五に王の卽位十年琉球王尙德が來聘せし記事あるをば成化十四年琉球に漂着せし朝鮮人七名の送還のことを記せるものと解して、濟洲島人金非衣、姜茂、李正等の漂着記に說及し、「一切支丹信徒としての小西行長」(名越那珂次郎、朝鮮)は彼が朝鮮役中基督敎的博愛主義を發揮したる經緯を述べてある。

歷史地理方面に於ては「帶水考」(大原利武、同誌)あり、從來の臨津江說、漢江說、藍州河說、を批評し黃海道鳳山郡文井面石城里城內洞なる帶方郡治址西方二里なる上海の地點に考へて帶水瑞興江說を提唱して居る。光海君の六年卽我が慶長十九年に慶尙道巡察使權昐が日本への交通の關係上戰艦兵船を常備する爲堤塘を築きたる遺蹟が「釜山鎭の永嘉臺」(松田甲、日鮮史話第三編)として現存せることを考證せる、「海州に於ける名勝古蹟」(白井源平、朝鮮)として高麗朝の首都開城の外港將た支那に對する表玄關として重要なりし海州の古蹟廣照寺眞澈大師碑五重塔、神光寺、山城等につき紹介を爲せるあり。次に經濟史社會史方面に於ては、「朝鮮に於ける契の利用」(善生永助、同誌)が高麗時代に發生せし一種の經濟組合にして李朝に入りて益々隆盛となり大院君時代には全鮮に勢を張りし襁負商の團隊の如きものとなりしが公共事業、扶助、產業、金融、娛樂を目的とし、今や合計二百七十七種の多數の種類となつて居る。當時の編に係る戶口總數の記錄によりて「李朝正祖時代の戶口」(同人、同誌)を

考へたる、慶尙道地理志に據りて「李朝世宗時代の戶口」（同人、同誌）を考へたる何れも實事求是の研究である。言語文字史料研究には「再び樂浪出土漆器銘文中の洎字に就いて並に牢の字に就いて」（原田淑人、史學雜誌）は之を彫と讀む根據として後漢鏡の銘文を引き、牢を吉祥語の堅固の意と解せるあり。「日韓同源と對馬の蘇塗」（川本達、朝鮮）につき對馬にて今に龍良山又淺藻濱をソトの濱と稱するは率土の意にはあらずして朝鮮語にてアジールの謂なるを論じたるは、「高麗三蘇考」（李丙燾）東洋學報）と題して國都開城を中心として北なるを北蘇後蘇、左なるを左蘇右なるを右蘇と謂ひしは蘇伐の略稱にもあらざれば離宮の意にもあらずしてこれ馬韓の蘇塗の蘇にしてAsyleの地の意ならむと謂へると併せ見るべきである。「朝鮮歌謠史の概觀」（安廓、藝文）は三國時代の吏讀文の鄕歌、百濟の井邑詞、高麗中世に現はれし別曲、高麗末期より起りし時調、並に漢字歌につき說述し殊に麗朝中葉以後のものは仙儒二觀念に化して自然と融和する思想の流動せるを見る。「高麗史節要の由來」（稻葉岩吉、同

誌）を考ふるに東國通鑑が取用せる高麗時代の史料は高麗全史と高麗史節要の二書に限定されしものであることより東國通鑑の記事中高麗全史に一致せざるもの多きは高麗史節要が高麗全史の節略にあらざることを證據立つるものでこれ高麗史節要が高麗全史と無關係になりし貴重なる史書なる所以である。「新羅史について」（朴昌和、中央史壇）之が記錄に依りしか口碑に依りしかを考へ、新羅の前半期六百年間は文字無く梁書の記載に對しても文盲說と否定說の二說ある程であつて三國史記の記載と矛盾する諸項あるは大研究を要すべきことであると唱へて居る。今より六十三年前に李裕元が選し申錫禧の書せし幅三尺長三尺の赤色緞子の「光化門の上樑文と李裕元」（松田甲、日鮮史話第三篇）の學問、李朝の太祖が卽位三年に高麗の制に法りて都の東北隅崇敎坊に設けし舊成均館卽ち今の「京城の經學院を見る」（浦川源吾、佛敎研究）も亦一朶の華英である。更に內鮮關係に至りては「後百濟及び百麗太祖朝の日本通聘」（中村榮孝、史學雜誌）がある。これは後百濟王甄萱が北方王氏高麗と對峙しつゝ

東方新羅を討ちて百濟の後繼者たらむと企圖せし爲、日本に後援を求めむとし、延喜二十二年以來日本に通聘を爲したる始末と、公的交通復舊運動を目的とせし高麗太祖の日本通聘とを述べその何れもが日本にて體裁よく拒絶されたることを論じたものである。「二百年前の朝鮮物語」(松田甲、朝鮮)は山口縣萩の安藤紀一氏所藏の日鮮交通の珍書の紹介にして、「紀州德川家の大儒李梅溪」(同人、同誌、日鮮史話第三編)は淺野氏に捕へられし李眞榮を父とし、日本女子を母としたる彼が、賴宣公の師友となり世子光貞の傅となり彼の發表せし父母狀は風敎の本鐸として領內一般に普及せられたる功績を論じ德川創業記考異十冊、南龍公言行錄などの名著あることを紹介したものである。家宣時代正德の通信使來朝に際し新井白石の建議に依りて禮遇改正を爲せしは何等我が國威を發揚する手段とはならずして唯朝鮮の惡感を煽りたるのみと謂へる「新井白石と朝鮮信使」(今村鞆、朝鮮)の問題を取り扱へるは、「小西行長の基督保護と神佛迫害」(名越那珂次郎、同誌)と共に內鮮關係の論者である。若しそれ工藝史に至りては「朝鮮の新羅燒」(濱田耕作、民族)あり、その所論の大要を見るに南鮮に、發達せし新羅燒は漢代の黝色土器の影響を受けて從來の赤燒より一步を進めたるものであるがその全盛時代は日本に於ける祝部土器の全盛時代より少しく遲くして七八世紀頃に大に行はれ遂に漢六朝の銅器及び之に摸せし支那陶器に習見する獸形脚のものが製作せられる樣になつた。これ支那陶器の影響を受けし顯著なる一證左である。しかし新羅國滅亡と共に漸く衰へ、遂に高麗靑磁の爲に壓倒されて亡びたのであると謂ふのである。以上は昨年度朝鮮史界の趨勢の大梗である。〔那波〕

東洋史　斯界研究逐年進步の趨勢は昨昭和二年度に於ても毫も減ぜず、眞摯な研究論文が續々と發表されて居る。先づ歷史的見地よりせる一般的時事問題方面を一瞥すると、「支那の本體と現象」(半澤玉城、外交時報)は現時の支那を紛亂兵爭の國家と見ること、及び軍閥を支那人の主體と觀、之に赤白の別ありて外國の手先となれるものと觀る事の謬見なるを論じ、「支那の國際的特殊地

位」(石射猪太郎、同誌)は、關係諸國が互に他を牽制して支那を牽引せる爲、高からずと雖も極て安全で却て我儘を言ひ我儘を行ひ得ると解してある。支那人に國家觀念無く政治範圍の無限大なると普通教育の缺乏とにて政治的に統一されない「支那の現狀を祝福す」(金崎賢、同誌)る者もある。同じく「支那不統一論」(松波仁一郎、同誌)を爲す者に支那人の愛國心の缺乏、官匪の跳梁、豪傑不出の內的原因と外國の力てふ外的原因に依り今後數十年其の望無きを謂ふあり、「對支策」(窪田文三、三田評論)、「支那排英運動の背景及び其の歸結」(山田正久、日本及日本人)、「支那の重大時局と日英外交戰」(大井二郎、同誌)、「支那問題と滿蒙」(山田武吉、同誌)皆こりごりに評論して居るが、就中「支那は支那人に委すべきや」(末廣重雄、外交時報)否やを論じ、支那に利害關係を有する諸外國の爲將た支那の爲干涉政策を斷行せなければならぬが今は尙早なりと說ける、「支那は永い眼で親切に觀よ」(淸水泰次、同誌)と題し交涉相手の無き支那に對し列國が治外法權を握つて居つても空文空權に過ぎないから、寧ろ之を支那に與へて我等は實利實益に向つて猛進せなければならぬ。これ支那を生かし列國を明るくする道ならむ。その强硬說は「日支親善中止意見」(西山榮久、同誌)で、國民黨は若い支那人の思潮に乘じて青年を利用し、北方の軍閥官僚は時代思潮を利用せず青年を排斥するものであるが、今次の動亂は支那の自由平等を求むる水平運動で而も其の手段態度は甚だ無暴なれば親善の一時中止可なりと謂ふのである。地理的環境から政治的に觀察すれば支那は北方、長江、廣東の三型に分ち得ると謂ふ「支那三分論」(小川節、同誌)、宜しく剎那主義機會主義を棄てゝ高遠なる理想と鞏固なる信念とを基礎として一日の得失より百年の利害に着目せよと謂ふ「對支政策管見」(桑原隲藏、東洋史說苑)、全國學生聯合會の成立事情より國民黨の組織と軍隊及中央軍事政治學校の內情に論及せる「支那の時局と民衆運動」(池田桃川、改造)あり。「革命と文學」(郭沫若、大調和)この關係を見れば文學は革命の前驅となれるもので、「支那革命の前途」(大西齋、外交時報)を見るに國民革命の主動力が武

漢派と南京派とに分裂し、國民政府も國民も而してまた國民黨も二つに分れたことと二つのものが對抗しつゝ楊子江を越て北伐軍を押し進めたが之は單なる軍事戰では無く民衆運動に棹せるものと時代思潮より見放されたる者との戰にて北方軍閥が愈々凋落する兆あり。「先秦諸子と現在の支那」(小村俊三郎、大調和)の關係を考ふるに支那の革命に思想上哲學上如何程の指導的原理あり又宗教上の原動力となるものあるかを考へ得らる。「支那古代研究の必要並に其傾向」(阪谷芳郎、斯文)は古代支那の有樣を其の儘現代人に解る樣現はす必要あるは猶バイブル研究が西洋古代の世相を躍如たらしめしが如くあらねばならぬことを謂ふ。次に政治史方面に於ては「秦始皇帝」(桑原隲藏、東洋史說苑)が細心放膽支那空前絕後の大偉人なることを內治外交の史實に基きて論證せるもの、「古代支那に於ける神判の一型式」(白鳥清、東洋學報)として姜源が生兒を不祥視せし史記周本記の記載を採り以て Father's recognition を論じたるあり、「卑彌呼法典の遍路」(淺見倫太郎、法學協會雜誌)は三國志所見の耶馬臺國の風俗の記事に就き之が記錄成立以前の支那全土を法域と爲したるものと謂ふ假定說を提出し Manu 法典に先立つべき卑彌呼法系が東胡法系の別派として研究の價値ある所以を說き、憲法が與へられて以來六年を經過せる「印度に於ける政情の變遷」(吉村源太郎、外交時報)は印度教徒と回教徒との抗爭を激甚ならしめ更にスワラジ黨と獨立黨との聯盟に龜裂を生ぜしめしかば、その大勢は英國との協調に傾き憲法の運用に參與して自治の促進を圖る風を起さしめた。「義和拳匪亂の眞相に就いて」(矢野仁一、史學雜誌)究むれば匪亂の後淸朝が德治主義の世界帝國の理想を失つたと謂ふことで、此の亂たるや單なる西教排斥の運動には非ずして之を名號として實は實行的精神の盛なる狂熱的の教團の力とそれに煽惑され易き附和雷同性に富める多數群集の綜合があつて斯の大亂となりしもので此の亂を最後として支那に於ける仇教騷動の起らざるは反撥の力を顯はすべき支那文化の力の滅亡せしが爲である。「支那農民運動と紅槍會に就て」(田中忠夫、東洋)述べ此の運動は必しも國民黨共產黨の煽

動に依るにはあらずして農民の自覺に依りても必然的に起り得るものであつて、河南山東直隸陝西一帶に存する紅槍會は實に農民の原始的祕密武裝組織で中小農民が貪官汚吏の苛歛、軍閥戰爭の破壞、土匪敗兵の騷擾に堪へず帝國主義の經濟侵略に依る破產と土豪劣紳の壓迫を受けて發生せし自衞組織で民國十年河南に發生し今は紅黃藍白黑等に分れ、軍閥の利用策に欺かれずその將來たるや光明に輝いて居る。紅槍會發生の一原因たる「支那南方の社會に見る土豪劣紳」(後藤朝太郎、國家學會雜誌)は國民黨の者が有產階級の者を總稱する名稱で土豪劣紳懲治條例第五條にその資格を列擧してある。世界的水平運動の勃興に直面して或る意味にて支那の水平社なる回教民族が露國と提携して帝國主義打破を企てつゝある將來は恐るべしと謂ふ「支那回教徒と革命運動」(笹川潔、外交時報)との關係、甘肅省內の回教徒の實情を述べ九人の鎭守使中八人まで回教徒にて七十歲を越ゆる馬元章が活神として尊敬せられ、故俗を墨守して支那人と根本的に敵視的位置にあることを指摘せる「支那六千萬の回

教徒と日本」(工藤鐵三郎、東洋)、「支那の革命」(桑原隲藏、東洋史說苑)軍が種族革命を唱へて漢人の敵愾心を振起せんと努むる所以を述べたる「支那時局の重大と日本の好意政策の限界」(矢野仁一、經濟論叢)を論じ孫文の三民主義を批評しその民生主義の共產主義に似ざることを說き今後の國民軍が露西亞を背景として如何に決せらるべきかを考へ國民黨の勢力發展に對し日本の執るべき好意的不干涉政策にも自ら限界あるべきを主張し滿洲に於ける我が特殊地位の拋棄せられざる限にて不平等條約撤廢の要求に應ずべきことを謂へる、何れも學術的にして警世的の好文字である。「支那統治原理の變遷」(田崎仁義、大調和)を討ぬれば皇、帝、王、覇、王、皇帝、大總統と七變せる樣に觀察せられる。日露戰役以來世界的問題となりし「黃禍論」(桑原隲藏、東洋史說苑)は本來毫も存在せざることで、却つて白禍こそ將來にその恐あり。「支那に於ける人口の分布」(野副重勝、地學雜誌)を地理學的に觀察するに三峽下流の楊子江地域が現代支那を一の有機體として組立つる首都を含むべき地域として

意義あり。轉じて經濟史社會史方面を見るに、「支那古代母系制に就ての一考察」(井上芳郎、東洋)は殷周秦の開國傳說が皆母を記してその出自を謂へる通り、支那の文獻時代に殘存せし古代姓族傳說は主として母系的のもので呂氏春秋禮記月令の祭事の記載に徵しても族中の長老が春に際し男女の媒を爲せし遺風存するを見るべく此の母系母權制度が漸次父系父權制度に變ぜしならむを謂ひ、儀禮喪服の記事などより「支那の大家族制について」(清水泰次、史學雜誌)同居同財より別居異財と移變したることを暗示して道德的なる祖先崇拜と經濟的なる同財主義とより義門の大家族制が行はれその純粹のものは同居同財にして變態のものが同居異財なるを謂ひ、巴里國民圖書館所藏の「燉煌戶籍殘簡について」(玉井是博、東洋學報)之が唐代の燉煌縣龍勒鄉都鄉里天寶六載の籍であつて唐時均田制の如何なる程度に實施されたかを知るに貴重なる史料なるを指摘し、「宋の檢校庫に就いて」(加藤繁、史學)之が孤兒の財物を保管しその中より每月生活費を支給し年々衣服を作り與へ兒が成長するまでに使ひ盡さざる爲常平倉の法に法りて人に貸附け利息を收めて孤兒の生活費に充てたる經濟機關なることを證明して宋一代を通じて府州縣に設立され義倉常平倉居養院安濟坊漏澤園とならびて弱者保護の社會政策の一として注意するに足るを謂へるは、房錢房緡僦舍錢僦錢が官有私有の貸家の屋賃の意にして唐の文獻より現はれ宋に於て特に多く發見され、久雨雪寒請雨禱雪、皇子女の誕生、聖節、祭天諸禮の行はるる際大中小の差等に應じて官有貸家の房錢を免除すること七日乃至半月、或は減額するは小民救濟の目的に出づるを謂へる「宋代の房錢に就いて」(加藤繁、史學雜誌)と共に興味深い題目である。若しそれ明代の田制に關しては「明代莊田考」(清水泰次、東洋學報)は洪武の勅にて莊田祿田は撤廢されし筈なるも、親王郡王は米を以て歲祿を賜ひ公主郡王諸子は其人一代限なる爲土地を賜り自ら莊田存在せり、此等は普通の土地行政の圈外に在りて直接支配せられたれば、祿田より轉來せる莊田と共に益々擴大せられ。嘉靖六年以來消極的禁止の態度をとり弘治三年頃よりは積極的に改革せむと

して而も如何ともするを得ざりし事情を論じ、「明代の地檢」(同人、東亞經濟研究)は明代天下の賦の十分の九を出だせし浙東浙西の田畝を太祖の天下一統後直に周鑄等に命じて調査せしめた事情より、洪武二十年の魚鱗冊の調製を叙し、之が紊亂せしは人爲的の奸策にもよるが水害等の自然原因もある。要するに洪武の地檢は開國の氣鋭を以て行ひしものなるが年所を經るに從つて實情に適せざる樣なり、脫稅防止策として十段冊歸戶冊が考へられ萬曆六年張居正の丈量調査斷行となりしことを謂ふ。明初の商屯は商人を募りて地を墾かせ耕種に勤めしめんが爲に粟を納れて鹽に中らしめた開中を目的とし洪武時代に着手せられ永樂年代に整備し成化弘治頃より粟の代に銀を以て代納せしめし爲廢頹せしことを謂へる「商屯考」(同人、同誌)などがある。「支那の地租梗概」(木村增太郎、同誌)は支那地租が理想的に改革さるれば收入が今より數倍せむことを歷史的に論じ、「支那の租稅制度に就て」(同人、同誌)田賦、算賦口賦關稅を論じ賦は後世國家經濟の膨脹するに伴ひて啻に田賦のみならず土地その

他の物、人若くば行爲に對して課する一般租稅は勿論官業收入又は私法上收入をも包含するに至り、而も陽には加賦の名を避け陰に附加增徵の實を擧げ其の弊清朝末にて其の極に達したるを謂ひ、「支那の人口問題」(桑原隲藏、東洋史說苑)は支那將來の人口增加率の向上、女兒殺害の風俗、壯丁過多と產業不振、海外發展の困難と產業不進を指摘して勞働者が生活に脅かされて將來の大禍根の伏在せるを指摘し、同じく「支那の人口問題に就て」(木村增太郎、東亞經濟研究)は歷代人口調査の不完全並に宣統元年民國十年の調査も不完全なるをば臺灣本島人の實相より類推し、人口過剩と交通經濟の未進の爲農民の困窮せることに論及し、「支那湖北地方の庶民金融」(西山榮久、同誌)は典當、左錢、借錢、請會の四種につき詳述し請會が我が無盡に當ることを論證した。その外にも「山西の爲替業者たる票號の起原と其變遷」(同人、同誌)を述べたのもある。前世紀の中葉長髮賊の亂中一八五三年九月小刀會匪が上海城を占領せし爲海關道臺が居留地に避難して徵稅不可能となりし際英國領事アルコックの

斡旋により一八五四年六月英米佛と海道臺との間に協定を結びて支那官憲に代りて關稅事務を執りしに始まり、總稅務司は傳統上四代間英人が之に任ぜしも必しも英人の獨占すべきものに非ざるを謂へる「支那海關の性質と總稅務司の地位」(高柳松一郎、外交時報)の說明あり。次に通商交通史方面では先づ通商に「日明交通史上第一關門たる十年一貢制に就て」(後藤肅堂、東亞經濟研究)之を野史類南京禮部案に基く謬說と斷定し、日明交通の本質より謂へば彼は貢我は商を目的とし、十年一貢は弘治年間に唱導されて嘉靖年間に實行されしもので永樂年代より然るにはあらざるを論ぜるあり、「德川時代に於ける長崎の支那貿易に就いて」(矢野仁一、經濟論叢)その起源を永祿五年とし此の支那貿易が葡支の貿易ともなりし經緯を叙し支那の絹織物と生絲の輸入が日本國內の絹織物業を起す動機を生じ、輸入絲に絲割符の適用となり寬永八年に至り從來の三箇所を改めて四箇所割符となりし始末を論ずるあり、「長崎貿易時代初期の絲割符法に就いて」(同人、東亞經濟研究)此の法が啻に絲の値段を定むるのみならず他の貨物の値段をも定むる制度にして家康が慶長九年堺京都長崎の三所商人に與へし特許權であるがその割符は割賦と解して合理的に諸記錄が說明さるべく、これ葡人の記錄に所謂バンカドウなることを詳論してある。之に關聯せる「寬永貞享時代の長崎の支那貿易」(同人、史學雜誌)は寬文八年より長崎奉行が支那船和蘭船の積載貨物を下直に買入るるに苦心して市法貨物商賣法を設定せし爲彼等商人の利益低減され和蘭人は輸入高を減少して長崎奉行の指定價格吊上げに苦心したるが其の結果は私船や支那船の輸入貨物を增加せしめ施きて長崎地下の配當銀を增したり、市法貨物商賣法の廢止は和蘭人の嘆願に依るにあらで長崎の官紀振肅華美の風俗抑制の爲の幕府の高等政策に出たものであるを謂ふ。次に交通にては「山東人の移住と徐福の渡日に就て」(馬場春吉、東洋)史記淮南衡山傳に据り秦皇の苛政を避けたる徐福の渡日はあり得ると論じ、「高岳親王の御渡天に就いて」(桑原隲藏、東洋史說苑)の二篇は其の路が廣東よりアラビア船に便乘

されし海路なるを考證し羅越國がシンガポール海峽の北岸の地馬來半島なるを主張して從來の謬說を一掃し、「眞如法親王の御事蹟に就き」（田中逸平、日本及日本人）境野黃洋氏の羅越國の位置擬定の誤なるを桑原博士の說に基いて反駁せるもある。「大師の入唐」（桑原隲藏、東洋史說苑）は弘法大師の渡海、福建着港、長安途中の水陸兩路、唐代の長安、長安に於ける大師の生活を叙して今見るが如く、靑龍寺卽ち今の石佛寺なるを論じた研究であるが、支那大陸、朝鮮半島の動亂を避れて我國の德化を慕ひ來りし「漢韓二系の歸化人」（中村久四郎、斯文）が忠良の臣民となりて特に漢學方面に貢獻したるを謂へる、古代東方の虛空狀態の密敎思想が希臘に移るに及び人間自らの價値、彼が神に對して傾倒する所のもの如何んに留意することとなりしは東西文化の接觸の一證にして「東邦文化と亞歷山大王」（隈本有尙、丁酉倫理會倫理講演集）との關係を知るに足る。次に歷史地理方面を見るに「耶馬臺國方位考」（志田不動麿、史學雜誌）は投馬國より耶馬臺國に至る水行十日陸行一月の記事より投馬國を備後鞆港とし耶馬臺の太和なることを論證し、「隋書の流求に就いての疑問」（伊波普猷、東洋學報）を發するや、第一回の朱寬の流求は臺灣で第二回の陳稜のそれは今の沖繩なりとすれば地理上日程上妥當なることを言語學的土俗學的立脚地より之を論證し、「葉調斯調私訶條に就きて」（藤田豐八、史學雜誌）後漢時代に朝貢せし葉調はペリォが Yavadvipa の對音とし、ラウファーが斯調の斯を葉の誤譌とし、私訶條を以て Sihadvipa とする說を反駁し斯と葉との漢代音の相通ぜしことを論證して山川風土の記事を比較し此の三國は卽ち悉く今日の Java なるを證明して居る。「五臺山史の一節」（井上以智爲、歷史と地理）は佛敎徒の所謂淸凉山、道敎徒の所謂紫府が五臺山なることより五臺五頂の變改事情、その高度、佛敎との關係を叙し、「唐の長安義寧坊の大秦寺の敷地に關する支那地志類の記載に就いて」（那波利貞、史林）支那の地志類に今の金勝寺を唐の崇聖寺隋の濟度寺の位置なるかの如く記せる書法の不完全なるを指摘するや、崇德坊の崇聖寺が會昌五年に廢せられて後崇聖の寺號は太平坊の溫國寺の敷地

へ移されて温國寺が消滅し、更にある時代に之が義寧坊の太秦寺たりし地點へ名と共に移されて宋元を經て荒廢し、明の成化十三年崇仁寺と稱せられて以て、今日の金勝寺に至りしものにして、今の金勝寺の地に隋代以來佛寺の存せしものにあらざるを證明した。「長安の青龍寺の遺址に就いて」(桑原隲藏、同誌)常盤博士が興善寺や慈恩寺との相互距離方向の關係より觀て今の石佛寺を青龍寺の址にあらずとする說を駁せられ唐代の里長步長の明確ならざる今日かゝる研究方法を用ひて趙鹵の訪古游記を過信せることの非學術的なるを非難し嘉慶咸寧縣志の記載の信憑するに足るべき理由を擧げ併せて咸寧縣志の二地圖を重ねて大雁塔を中心として考ふることの非學術的なるを難し、斷じてその今の石佛寺なることを考證した。「燉煌千佛洞の營造に就きて」(羽田亨、歷史と地理)洞の完成者刺史建平公東陽王に關する史實と其の時代とをば中村不折氏所藏の燉煌出土經卷佚藏初分卷と魏書の記載とより證明し、大魏の普泰二年(西曆五三二年)に東陽王元榮が瓜州刺史なりしこと、彼が元丕の一族ならむことを指摘してあるは、「燉煌雜考」(石濱純太郎、支那學)に王道士に依る石室發見の時代一九〇〇年說を排斥してそれより以前數年の事としたると共に燉煌石室の年代に關する姉妹篇である。「支那文明發達に於ける地理的因子」(野副重勝、地學雜誌)は支那の文化的政治的南北分裂が先史時代以來河川によりて決定され居ることを謂ひ、往昔の原始的小國家は宗教的にこそ聯盟したれ、政治的には結合せざりしものにして、汾水洛水流域が早く文明地帶となり、之に遲れて渭水盆地、楊子江谿谷、海岸地方が開發せられたことを謂つて居る。「清朝學者と地理上の分布」(植野武雄、斯文)は支偉成編の清代樸學大師列傳を中心史料として清朝學者の地理的分布狀態を考へむとする企である。宗教信仰方面に轉ずるに「東洋古代農民信仰の比較」(井上芳郎、東洋)は支那の神農氏信仰とバビロニアのリムノン神信仰とを比較して波斯のアベスタ信仰に論及し、「馬鳴信仰と養蠶機織」(橋川正、史林)は中唐時代馬鳴を蠶神として信仰する風俗の已に成立せしことを證明してある。則天武氏の周代に大雲經が武后

登極の識となりし爲大雲經を天下に廣布せしめて大雲寺の設置となりしは金光明經と法華經とを尊信して天下に國分寺を設置せし聖武天皇の擧に類似する所あれども、彼は僞託と曲解とその宣傳とに起因し、我は全く當代流行の正經たる前記二經文に對する信仰を中心として罪滅と護國との趣旨に基けるものでその動機に天地の差あることを論ぜる「大雲經寺と國分寺」(矢吹慶輝、宗教研究)、河南彰德府西南七十五里の寶山靈泉寺が六朝以來の名刹にして殊に魏末に靈裕法師が一代の苦辛を以て完成せし寺院であるが此の靈裕法師は五五百年の末法觀及び七類の佛名の普敬に於て同時代の而も後輩なる三階教の信行禪師と全く一致する所あれば、此の寺こそ三階教の發源と謂ふに足るを謂へる「三階教の母胎としての寶山寺」(常盤大定、同誌)、北齊武成帝時代の人道綽禪師が末法意識に立脚して淨土教を宣揚せしは信行の三階教思想に影響する所多きを謂へる「道綽禪師の思想的背景」(佐々木功成、龍谷大學論叢)、何れも傾聽に値する。「帝釋、阿修羅の研究」(山邊習學、佛教研究)は此の傳說が吠陀時代より存し釋尊當時まで既に一千有餘年間傳へられ、阿修羅は過去の神惡の神として排せられ帝釋は現在の神善の神として崇拜せられたれば、釋尊は當時の民間信仰を執り入れて之を佛教的見地より淨化せむと努めし爲、帝釋信仰をも採用したるもの、而して此の兩神の戰たるや實に文化主義と軍國主義との對立の古くより存せし證據とすべきである。「マヅダ教研究の資料に就いて」(荒木茂、宗教研究)アケネメス族の歸依せしマヅダ教は勿論、ゾロアスタ教出現以前の原始マヅダ教の直接研究資料無く、ササン朝以後のものを以てするはバーシーイズムの研究に過ぎざれば寧ろ印度の吠陀文學が最も有力なる參考資料と爲ると思はれる。佛滅後九百年に出でし千部の論師「婆藪槃豆大士の著作と淨土教」(加藤智學、佛教研究)の關係を叙し無量壽經優婆提舍と悲華經との間に聯關する思潮あるを論證せる、前清末以來尊孔を以て清室の基礎を鞏固ならしめむとせし計畫が第一革命により根柢より覆滅されしが國體の改まりし民主共和の民國に孔子教が其の儘利用出來るや否や憲法審議會の一大

議案として今尚ほ未定なる「支那の國教問題」(桑原隲藏東洋史說苑)を論じ孔子教が國教とせられても何等の利益は受けず却て教理の紊亂を招くべきを謂へる、一九二二年の反キリスト教運動以來キリスト教の神學上のドグマを反駁するや支那に於けるキリスト教を以て歐米資本的侵略主義の假面を被れる迷信と目しミッション管下の學校回收運動となりたれば「支那に於けるミッションの方向轉換」(中山優、外交時報)機今や到來し今後は純粹の靈魂の世界に精神的使命を開拓せざるべからざる勢と成つて來て居る。次に言語文學學術方面に就いて一覽すると、大集經大唐西域記大慈恩寺三藏法師傳等の「佛典に顯るる振旦の語に就いて」(松本文三郎、史林)之がCina sthâna なる印度語より緣由しその慣用は迦膩色迦王時代まで溯源し得その範圍は支那本部よりも一層廣く西方の蕃夷まで包括す、而して此の語の支那に傳はりしは後漢獻帝時代なりとなし、「龜茲國語とその研究の端緒」(シルヴン・レヴィ、現代佛教)に關して佛教經典中曆に關するもので明藏に入らざる七曜攘災決、梵天火羅九曜七曜星辰別行法の三部の胡譯の發見始末よりソグディアナ語の研究に重要なる資料を加へたるを紹介せるあり。「元朝祕史之主因亦兒堅考」(王國維、史學雜誌)は其の史實が金の乞軍に當れば乞は正に主因の語の對音なるべきを謂ふ。「鴨脚樹の和漢名」(新村出、大調和)を考ふるに鴨脚の二字は宋元時代の北支那音にてはヤーチャオなれば我が入宋入元の僧侶が此の音を傳へてイーチャウと轉じたものであらう。近頃フランクフルト・ツァイツング紙上に掲げられたるコズロフ所得の「西夏文般若經の斷片」(ニコライ・ネフスキー石濱純太郎、藝文)を解讀して之が宋の施護譯の佛說佛母出生三法藏般若波羅蜜多經の惡者障法品第十一の文なるを證明せるあり。「明の四夷館に就いて」(神田喜一郎、史林)之が清代に四譯館と改稱せられて正陽門外楊梅竹斜街に移置せらるるまでは永樂五年の創設以來玉河橋の西に位置し、初は韃靼、女直西番、西天、回々、百夷、高昌、緬甸の八館、正德六年八百館が、萬曆七年暹羅館がそれ〳〵增設せられて十館となりし始末より其の官制譯字官養成の事情に說及した。

「儒教の特色」(少柳司氣太、斯文)は渾一的體系、大中至誠の道にてその實學なるに在り、「玄奘三藏の因明學」(手島文倉、宗教研究)は龍樹の方便心論世親の如實論陳那の著書等に感化せられ在竺中は衆禰、調伏光、戒賢、般若跋陀羅、勝軍居士の因明注釋書を讀み、歸來支那因明學の鼻祖となり、我が邦に傳るや南寺北寺の二傳系統を生じた。「薤露歌及び蒿里曲考」(菅谷軍次郎、斯文)は漢初田横門人の作にて現存の挽歌中最古のものである。「唐の進士」(鈴木虎雄、支那學)科は初は吏部の考功員外郎、開元廿四年以來は禮部侍郎が試驗官に當り詩の隆盛を促す一因となれり、及第者の挨拶、新進士の宴會九種、每年平均廿九人の合格者ありしことより朋黨の弊生ずるに至れり「燉煌遺書目蓮緣起大目乾連冥間救母變文及び降魔變押座文に就て」(靑木正兒、同誌)狩野博士將來傳寫のスタイン集蒐中の孝子董永傳、季布歌と比較し何れも俗文學の先驅にして後世の彈詞鼓詞に頻するものと目し、「目蓮變文紹介の後に」(倉石武四郎、同誌)は內藤博士將來の影片舜子至孝變文一卷に及びたり。「宋代異學禁」(安

井小太郎、斯文)は南宋高宗紹興六年陳公輔の說により程頤王安石の說を以て士を取るを禁じて以來寧宗の開禧三年史彌遠が韓侂冑を誅するまで七十三年間續きたることを述べ、「支那近代小說考」(米田祐太郎、東洋)は林畏廬のフランス小說翻譯が從來の文學革命の大團圓の型を打破し、包天炎、周瘦鵑、惲鐵樵諸氏により改絃更張の變革期に遇へるなり。「現代支那に於ける國學遺動」(松井等、國學院雜誌)は大正八年の文學革命が端緒となりて政治上經濟上社會上に革命運動起り古典中の民族精神を掴まむとする運動の起りし始末を述べ、「對支文化事業に就いての希望」(桑原隲藏、東洋史說苑)は古書の蒐集保存出版、支那に關する外國人の著書蒐集、古蹟古物の調査及保存、學術探檢隊の派遣、支那研究に必要なる參考書の製作、漢籍の整理、主要なる漢籍の翻譯を主張してある。「歐人に封ぜられた漢字及漢文學」(內田魯庵、大調和)は亞細亞文明の復興が世界の脅威であることより獨逸の大學教授が文學としての漢字の優越を認め又音義の明確嚴密を要件とする學術科語としては漢字を用ふる

が最も適當なるを聲明せるこゝに及んで居る。風俗史方面には「支那人辮髮の歴史」(桑原隲藏、東洋史說苑)は內地在住の漢人が明に辮髮したのは金以來の事なることより蒙古人の辮髮を說明し、明淸革命の際漢人が之に反對せし經緯を論述し、「支那人の食人肉風習」(同人、同書)はその動機を分つて饑餓、戰時糧食缺乏、嗜好、憎惡、疾病治療の五種とし、「支那人の文弱と保守」(同人、同書)は平和思想の學說の流行と利害打算の爲文弱となり、支那文明が異族に卓越せるを儒敎の主義より保守となり、精神よりも形式を貴ぶ風を生じたりと謂ひ、「支那人の妥協性と猜疑心」(同人、同書)は法家の思想を繼承せる支那歴代の官制が官吏を信賴するよりも猜疑すべく組織されある例を擧げて二者共に支那人の痼疾にして進步改造の大障害となることを謂つて居る。その外後藏の大寺ダシルフンプー寺內の三千八百の大衆が酒色に耽溺し六代の法王淨音海が自ら破戒行に入りて歌ひたる俗謠を謳歌して百鬼夜行の觀ある「西藏佛敎と酒肉色」(河口慧海、現代佛敎)、靈柩安置の風、淸明節の墓參修理、幼兒の死骸は烏獸の食ふに任す北支滿洲の風を述べたる「支那の葬式に見る風俗」(後藤朝太郎、東洋)がある。思想史文化史方面に於ては「印度文化のスメル起原說」(西村眞次、大調和)をばダウントの古代文明中心、ワッデルの印度スメル式印章の讀解の說に基きて提唱し、從來の印度文化がアールヤ族の手により獨立的に印度に發生したゝと謂ふ通說を排せむと試むるあり、「支那古代史と占星術」(飯島忠夫、史學雜誌)は支那の歴史が占星術者の手により發達し、淮南子天文訓に見ゆる宇宙生成論は陰陽五行說を生じ上古史の年代は占星術の應用によりて作爲され占星術と五行說干支が西方學術の影響を受けて西紀前三三三年以後に成立したるを論述し、「支那古代信仰に於ける星辰と蛇との關係」(井上芳郎、民族)は現在の春分點より計算して三百二十度を隔る危宿、虛宿又はそれに隣接する須女宿附近の約三十度の幅間が子と呼ばれ蛇と關係づけられたることが戰國末期漢初の記錄に見え、北斗の運行が龍蛇の首をもたげて天を望むに似たるより北斗と蛇崇拜が結合せしならむを謂ひ、「上代支那の日と月と

の說話について」(出石誠彦、東洋學報)は日月創生說話、日中の烏說話、月の蟾蜍說話を論じてバビロニアのそれと比較し、「戰國時代文運史論」(那波利貞、歷史と地理)は支那古代の部族群據が漸次呑噬併合せられて大部族が殘り自ら天下歸一の趨勢に推移せる事情を論じ輿論の勢力發生と孔門弟子の天下散居に及び文運の中心が魏の文侯齊宣王秦の呂不韋の幕中と三度變遷せしことを指摘した。「崔述の禪讓に就ての考」(岡崎文夫、支那學)は古の聖人は皆天下を以て子に傳へざる習慣にして王位繼承制度のまだ定らざりし遺風と觀られ孟子の歷史學のイデーなる天命の存在を民意の表顯によりて承認する考を古代の制度に關係づけて考へたるもの、「堯舜傳說の構成に就て」(青木正兒、同誌)これは何れも洪水傳說が中心を爲し、黃河の自然的水道變化を禹の行蹟と爲し之に契稷の傳說が附加され、之を綜合して更に冠するに堯舜傳說を以てせしものであると考へ得られ、殷周の交文柄を握りし巫史は「經學の源流」(本田成之、同誌)を爲し、「孔夫子の集大成」(兒島獻吉郎、斯文)は學んで厭はず敎へて倦まざる孔子の人格の標語として集大成の三字の最も妥當なるを謂ふ。「孔子の仁說」(青木晦藏、佛敎研究)は人心の全德にして人を愛し物を利し以て內己を成すと共に外物を成す意義であつて仁愛、恭敬、忠信、克己、復禮、歸仁を以て物我一體となるを理想として居る。「阿含經典に現はれたる佛陀の自殺觀」(林岱雲、觀想)は佛陀が全然知らざりし場合もあり、佛陀が知りつゝも然も文面には全然可否の意志を表面せざるあり、條件を附して肯定されたるあり、全然否定せる場合もある。「朱子學の精隨」(內田周平、觀想)は朱子の眞劍態度を賞揚し、「西洋文明と東洋文化」(加藤一夫、大調和)は西洋人の西洋文明の沒落思想起るに關聯して彼等の意識に上るは東洋の勃興思想であつて、之に東洋を以て西洋文明の繼承者と見るもの、西洋文明の沒落を救ふ道は東洋文化を吸收するにあるとする者、東洋文化が今後の世界を支配するならむとする者の三見解存する事を述べ、「支那古代思想の現代化」(山口察常、大正大學學報)は自由獨逸青年團が老子を崇拜し、獨逸國際青年團が孔子崇拜にて現代の科學

智識と相對立して現代の困難問題をば解決するに支那古代思想を以てせむとする試あるを紹介したものである。「支那文化の研究に就て」(内藤虎次郎、大調和)は梁漱溟の印度を禁欲、支那を安分、西洋を進取と總評せるに對し文化には時代相の變化あることを指摘して之を難じ、支那青年が支那文化に對して理解性を失ひつゝある今日その傳統を維持し之を發揮するは日本人の使命なりとなし、「晉室の南渡と南方の開發」「歴史上より觀たる南方の開發」(桑原隲藏、東洋史說苑)の二篇は共に南北支那文野の區劃に大變動を與へたる晉室南渡以來の南方開發唐末五代以來の嶺南方面の開發されし歴史を論述したる雄篇である。「近世支那文化の日本への影響」(中村久四郎、大調和)は生絲及織物飲食物の流傳を叙し、「支那の平和思想」(遠藤隆吉、同誌)は本來平和的なる爲特に平和思想として高唱せられざりし所以を論じて居る。若しそれ特種問題研究に至りては名篇大作甚だ多數に上る。その主なるものについて觀れば「支那に於ける刻石の由來、附不得祠とは何ぞや」(藤田豐八、東洋學報)は石鼓の製作年代を疑ひて秦皇以前に刻石の風の存在せし事を知らずと爲し波斯の Behistun の刻石と阿育王の刻石と秦皇の碣石門の刻石とを相互關係ありとし、秦の名が西戎を通して西に聞て Manu 法典中の Cina となりしことを說き、併せて始皇本紀の不得祠を Buddha の祠ならむと疑へり、之に對して「藤田博士の不得祠」(鈴木券太郎、同誌)は祠るを得ずと讀むことの妥當なるを論證した反駁論である。「支那上代の紀年に就て」(新城新藏、歴史と地理)春秋以前には一定の曆法無く、戰國の上半期は春秋後期曆を用ひ戰國の半より漢の太初まで顓頊曆を用ふ、紀年は西紀前一〇六六年以來、曆日は春秋の初年西紀前七二一年以來のものを今日明に爲し得るとし「干支の起原に就いて」(飯島忠夫、東洋學報)蔡邕の月令章句に依りて後漢學者の干支の成立並にその製作目的につき有せし知識を知るべく、五行說は深く干支說に浸透し居ればと新城博士や梁啓超、ラウファーの如く五行說より分離して十干を考ふるは誤なりと斷じ「東洋天文學史大綱を讀みて」(錢寶琮、支那學)此の論評を批判する說は夏

曆の時令は民國以前の陰曆に等しく、冬至が十一月に當り、周曆の冬至が一月となるは曆家が二回の閏を失ひしならむ、戰國初期には夏正、周正並び行はれ末期に至り夏正の區域の擴まり周正が漸く廢止され、戰國中期の陰陽五行說の隆盛が支那の科學を遲滯せしめし結果、秦漢の際には黃帝、顓頊、夏、殷、周、魯の六曆が民間に用ひられたることを說いてある。「支那古代傳說への疑問」（井上芳郎、民族）を發しては龍蛇崇拜中の一形態が雷雨神の信仰と結合し龍卽ち雷雨神と考へらるゝ樣に發展し羿と鄂とが同根傳說として成立せるかを疑ひ「漢明求法の紀年に就いて」（松本文三郎、宗敎研究）夢の永平三年四年七年說、使者派遣の六年七年說、使者歸朝の七年八年十年十八年說を批評せる結局は確定し難しと爲す。「西域研究」（藤田豐八、史學雜誌）は甘州附近を月氏の故地、肅州以西敦煌地方を烏孫の遊牧地とする說に對し、昆莫の居りし地と其の父難兜靡の居地とが同一なる證據なければ昆莫が西域卽ち張掖地方に居りしは月氏が匈奴の爲に驅逐されし後の事で、烏孫が月氏と共に祁連敦煌の間に居りしは昆莫の父の時代にして之を以て昆莫時代の地を甘州にあつるは尙ほ疑ふべしと爲し、月氏第二次の西移の年次は匈奴の老上單于の時河西の故地よりオキザス流域に移りしもので敦煌祁連の間より伊犂へ移りしは孝文帝の四年又は三年であつて冒頓單于に驅逐されたる爲なりとして居る。「孔孟の權道に就いて」（內野台嶺、斯文）抽象的に物事を比較計量して其の正しきに從ふ意なりと爲し、「支那の宦官」（桑原隲藏、東洋史說苑）は隋以後宮刑が廢止されると志願者を以て補充するが原則となり、時には邊裔の蠻民を捕へて之に充てしが、彼等は利慾心强き爲政治を紊亂したのである。「支那史上の偉人孔子と孔明」（同人、同書）を評すれば孔子は一生平凡にて豫言無く不斷の努力を以て偉人と爲りし者で人格圓滿吾人の手本として恰好であり、孔明は至誠忠義公平無私淸廉寡欲の人格者と謂へる。「サンバンの支那起原說に關する一二の考證に就て」（向井章、東亞經濟研究）「東洋思想の科學的分析」（田中龍夫、太陽）「東洋文化の精華」（羽溪了諦、佛敎精神）「海寧王忠愨公傳」（羅振玉、藝文）、「生覇死覇

考」(新城新藏、藝文)、等百華爛熳たる中にも、「ネストル教の僧及烈に關する逸事」(桑原隲藏、東洋史說苑)は唐の玄宗時代市舶使周慶立の相棒となつて奇器を玄宗に進めし波斯僧及烈がネストル教碑所見の大德及烈其の人なるを考證し、「疇人傳論併せて Van Hëe 氏の所說を評す」(三上義夫、東洋學報)は白耳義の Van Hee 氏が阮元の疇人傳を數學者列傳と譯せることの當否より論じ郭守敬の三角法、曆法、不定係數、算術的三角はアラビア、大衍求一術、一行の曆は印度數學に淵源し、一六〇〇年以後の諸算式は歐洲のものにて支那人に獨自のもの無しとする說を難じ祖沖之の如き大家あるを謂ふ。「東洋人の發明」(桑原隲藏、東洋史說苑)は西曆八世紀中葉の木版印刷、十一世紀中葉の活版印刷、十三世紀中葉の金屬活字製作、二世紀初頭の紙製造、十一世紀末の羅針盤使用、宋人の火藥發明を述べ、「支那の城郭と長城に就いて」(鰐淵友常、歷史地理)支那都市卽國家說を主張し城郭の原始よりその壁の軍事的價値尠きを論じ、長城を以て國の城郭と爲して居る。「支那古代の長城に就いて」(橋本增吉、史學)齊の長城の位置と齊の國境線との關係を論じた。「金人、金狄、金仙」(中島竦、史學)は始皇の金人を佛像の模本なりと解する說で、「倭寇王王直」(後藤蕭堂歷史地理)、「倭寇に就て」(同人、中央史壇)は明人が八幡賊と呼ばざりしこと、南海治亂記の杜撰、異稱日本傳明代部の大改修を要すること、倭寇が裸體にあらずして紅綠衣を着用せしこと等を論證し、「東洋史上より觀たる明治時代」(桑原隲藏、東洋史說苑)は朝鮮併合、東亞の覇國、世界の一等國、文化の輸出、亞細亞人の覺醒の五項に分けて東洋史上世界史上稀有の大事件なりと爲し、「支那學研究者の任務」(同人、同書)は獨逸のリヒトホーフエン米國のロツクヒル、英のフヒリツプス、獨逸のヒルト、英のワイリ、レツグ、露のブレツトシユナイデル等の研究を例として本職の暇に不便を忍びて眞面目に研究する美風あるを賞揚し我が邦人はつとめて科學的に分析綜合兩方面に努力せざるべからざるを謂ふ。「十六世紀末に於ける澳門及日本の活字出版」(岡本良知、思想)はポルトガル圖書館文書館年報第一卷五號の Jardao de Freitas

氏の著を譯出し一五八八年澳門に印刷術の傳はれることを詳述した。「ヴォルテールの支那文明觀」(後藤末雄、思想)は其の正確さに於ては不完全なるも其の態度は最眉目にして、これがやがて歐洲に於ける敎會攻擊の武器となりしものである。更に工藝史美術史方面に於ては「書帙の歷史」(那波利貞、歷史と地理)を述べて帙の異稱殊に書衣書袋につき考證し、書衣に古今二意あるを指摘しその材料に布帛、竹、紙、木、獸皮あるを說明し、その形狀を考へては縹囊湘帙を叙し、延喜式の記載に據りて製作の行程を說き、摺本、旋風葉本蝴蝶裝本の樣式を論じ唐末の書衣より今日通行の帙への變遷を考へ夾板帙の起源を梵夾にあるとした。「宋玉の招魂賦と漢の畫象石」(原田淑人、同誌)この關係を考ふれば、兩者何れも不愉快にして恐悸すべき圖象と愉快なる情景とが相對象し同一の心理に出づることを知るべく、「嵩山會善寺に於ける淨藏禪師身塔」(澤村專太郎、國華)は單層八角樣にして天寶五載の建立に係り、その蠢股は支那大陸の古樣木造建築の細部を示し、覆鉢塔に比して外來的特徵が無く、

法華經所說の多寶塔に擬したものと謂ひ得る。「佛徒の印像」(藤田豐八、史學雜誌)は唐の馮贄の雲仙雜記の印普賢像を初見とすれども此の書は宋人の僞書なれば玄奘が此の學は明に爲し難きが、義淨の南海寄歸傳に拓摸泥象或印絹紙とあるは確實なる史實で義淨の書き振より見れば玄奘の渡天の際既に印度にて此の風の行はれ居りしを知るに足る。「支那建築の特性に就て」(藏田周忠、大調和)總覽すると年代の重層と地理的變相に拘らず一つの中心的形式の踏襲發展の反覆に終始したるに過ぎない。「花頭窓と花狹間」(天沼俊一、歷史と地理)は北京五塔寺碧雲寺黃寺雍和宮の實況に徵し印度古代の佛敎建築が回敎建築に影響し更に西藏を經て支那に流傳せしものなるべく、「支那陶磁器に表れたる西域文化」(小村俊夫、東亞經濟研究)、「エヂプト・インド・ペルシヤ及支那の藝術の地理的研究」(中山忠直、東洋)の二篇も面白い。殊に後者は支那美術のヌウボー式なるを指摘しこれ自然の地形の悠揚たる有樣の影響したるものと說いてある。「東洋古美術に現はれたる日月星辰」(松本榮一、國華)は日

月相儷し、月桂落下の思想は長阿含經卷二十二世紀經世本緣品より由來して後秦の頃既に支那に行はれ、四五世紀の交に月桂說が成立せしものゝ如く、隋唐に及んで月中に桂樹を畫く畫風起り、日天月天の畫之に亞いで起つたのである。「吐蕃畫の資料」(瀧拙菴、國華)は元朝以前のものには優秀の作品あり、スタイン氏將來の觀音曼荼羅圖の如きその描線は謹細にして銅版畫の如き感あるを特色とし、以て唐宋間の西部支那の藝術に影響せし吐蕃藝術の面影を知るに足りる。松方公所藏の「趙子昂八駿圖」(無外子、國華)は元の朝廷が阿爾尼格の傳へし尼波羅式梵像畫の流行を計りしに當りて之に對抗して漢式の畫を支持せし標本畫として價値あり、「米元章評傳」(今關天彭、中央美術)と共に一讀せなければなるまい。南齊の謝赫に唱導された「氣韻生動」(伊勢專一郎、思想)の思想の發展の大要を論じたのも有益なる文字とする。「中國演劇の現在及將來」(余上沅、大調和)を見るに舊劇新劇が對抗し、殊に寫實主義が流行してより舞臺が物質化され、唱演が體力化せられて所謂外江派の勢は北京に浸潤し、舊劇の營壘は已に破れ新劇の陣容も未だ成らざる過渡の狀態にあれば、中國戲劇社同人の責任は重大なりと謂はねばならぬ。次に史料研究方面に見るに「左傳に現れたる謠諺」(澤田總淸、國學院雜誌)はその形式三、四、五、七字句あり甚だ不規則なるがその四言のものは詩經に比して遜色無しと論じ、謠、諷、誦につき晉の獻公の時の童謠以下三十三首を摘記し、「孟子と春秋」(武內義雄、支那學)との關係を見れば公羊春秋は孟子の學が齊に傳へられて齊の地方的色彩を加味して發達したるもので、穀梁春秋は公羊の學を治めた人が荀子の影響を受けて改作したものであらうと思ふ。列子の校定者、その篇目、高麗本、列子の年代に關する劉向張湛柳宗元高似孫復堂生の說を評し鄭繆公穆公時代說を排して繻公時代說を提唱し、その學徒を論じ內容の矛盾を指摘したる「列子を讀む」(幸田露伴、思想)の雄篇もある。「老子化胡經」(桑原隲藏、東洋史說苑)が西晉の惠帝の頃道士王浮の僞作に係ることを考證して道佛二敎衝突の經緯を論じたる、「大秦景敎流行中國碑に就いて」(同人、同書)唐の大秦寺

に建中二年に景淨が建立したる碑の由來とその發見始末を論じ其の實見談とホルム氏の摸造碑製作のことに及べるは、般若系の經典道行經以下唐梵翻對字音般若波羅蜜多心經に至る四十六部の經文の翻譯事業を述べ、須菩薩提品以下大明度經の八部のことに及べる「支那般若翻經史稿」(美濃晃順、佛教研究)、及び呂祖謙が陳壽の三國志を節約せし「宋版三國志詳節を考察す」(樋口龍太郎、斯文)と共に何れも傾聽に値する。「金字蒙文藏經金光明經の斷簡に就て」(石濱純太郎、支那學)は內藤博士所藏の金勝陀羅尼品の一葉につきて梵本、三種の漢譯本、甘珠爾に收むる三種の西藏譯本、于闐譯本、ソグド譯本、回鶻滿洲蒙古譯本の來歷を論じて北宋版本義淨譯本と對照補箋した。「無量壽宗要經考補」(同人、東洋學報)は西藏本回鶻本梵本于闐本漢本蒙古本滿洲本を比較研究してある。「明の陳誠の使西域記に就て」(神田喜一郎、東洋學報)永樂年間三度奉命西域に使せし陳誠の傳記を吉安府志によりて明確に爲し、その奉使は明史哈烈傳所見の通り第一回の永樂十一年のものは白阿兒忻臺の招撫の結果明廷に來貢せし哈烈以下の諸國の使臣を本國に護送する任務なり、十三年に歸るや乃ち使西域記を上つたのである。但し學海類編本の該記は抄本にして原本は寫本として傳へられ千頃堂書目、拜經樓藏書題跋記に見ゆるものはその完本ならむ。アルベルト・カステラニ氏によりて「論語の伊太利譯成る」(大類伸、斯文)は「觀堂先生著作目錄」(神田喜一郎、藝文)と共に注意すべきである。「露西亞出土の支那型古銀塊に就いて」(加藤繁、東洋學報)一八五一年ペルム縣ソリカムスク郡ロゼストウエンスキー村にて、一九一四年同縣チエルヂンスク郡チギロフ村にてそれ〳〵發見された銀塊は何れも漢字の刻字見えこれ支那の Yamba ならむとする說に贊成し法馬型の銀鋌の斷片なることを證明し、同種のものが享保年間博多聖福寺に發見され居るを謂ふ「コズロフ探檢隊の發見品」(小牧實繁譯、歷史と地理)は「サヴイエート・ロシアに於ける極東並に中亞の研究」(石田幹之助、黑潮)、「北蒙古發見の新史料に就て」(同人、歷史教育)と共にスキチア人の藝術が中央亞細亞北亞細亞東亞細亞のそれに影響を與

へたることを推知するに足る貴重なる資料なるを謂つて居る。學術的旅行談及紀行には「歐米に於ける支那學研究の近狀」(宇野哲人、斯文)は米のラウファーの研究、紐育博物館の故端方舊藏の柩禁、フヒラデルフヒア博物館藏唐の服陵の八駿刻石の一部、獨佛の東洋學、コルヂエの舊藏本の細川侯に買入れられし話を傳へ、「歐米人の東洋文化研究に就て」(井上哲次郎、大調和)は獨逸に於て最も研究熱が顯著にして其の他の國々にも益々盛なることより彼等の研究に資すべく神道大藏經の編纂の必要あることを提唱して居り、「アノン・カラアム寺訪問記」(增山顯珠、龍谷大學論叢)は遥羅盤谷西岸の此の寺見學の實情を述べ、「人類學上より見たる西南支那」(鳥居龍藏、人類學雜誌)は明治三十五年七月より翌年三月までの旅行記にして、「北支那視察談」(竹田復、斯文)は民國の大勢を左右する基調として文化運動に注意すべきを謂ひ、「熱河赤峰の旅日記」(鴛淵一、歴史と地理)は北京より順義、密雲、古北口、三道梁子、熱河、旺業店、公爺府、赤峰、四家子、建平、馬迷水、杖子店、公營子、建昌、三十家子、平泉、喜峰口、遵化、薊、夏店、各地二十八日間の風土地形紀行であり、「方繼孺の墓を搜り得て」(志賀重昂、日本及日本人)は鳥取市興禪寺に方孝孺十五世の孫方繼孺の墓あるを發見した記載である。桑原博士の東洋史說苑は舊稿を蒐集編纂したものであるが、編纂に當りて每編大增補を加へられ殆んど新作と謂ふに足る程面目を一新して居るから敢て昭和二年度の論文として茲に編入したのである。之を以て昨昭和二年度東洋史界の趨勢の大梗とする。〔那波〕

西洋史　昨年の西洋史學界を顧るに國史東洋史に於ける如き賑盛さはなかつたが研究の不便研究者の少ない點等から考へるとそれでも相當盛な年であつた、と言ひ得る。

まづ古代東方に關しては「埃及紀行」(天沼俊一著)がある。是は日記體の紀行ではあるが平易な文章と多數の寫眞とによつてカイロからアスアンに至る下埃及地方の古跡を著者と行を共にする感があり「古代埃及に於ける馬に就て」(岡島誠太郎、歴史と地理)は碑文、言語、浮彫

等に據り馬はヒクソスの侵入により始めて埃及に將來されそれ以來大いに各方面に利用された事を述べ「バビロニア先住民族シュメール人問題について」(中原與茂九郎同誌)は西紀前三十世紀以前に南バビロニア地方に住めるシュメール人の人種所屬及び原住地に關する諸家の說を紹介した。尙シュメール人の立てたウルク國の契形碑文に關する研究として「ウルク國王シインガシイドの物價碑文に就て」(同氏、同誌)及び「ウルク國王シインガシイドの粘土板碑文の解讀と解說」(同氏、史林)があつた。

希臘時代に關して「ソフィストとその時代」(原隨園、史林)は前五世紀頃の希臘のソフィストを說き彼等が法(ノモス)について否定的な主張を有して居た事を述べその點から彼等とその時代との相關にまで及び、「ペリクレスとその後に於ける戲曲」(佐藤堅司、史學雜誌)はペリクレスの理想主義を悲劇に示したソフォクレスに筆を初めエウリピアデス、アリストファーネスを說き現實的な快樂主義への變遷を述べた。

羅馬時代については「羅馬の驛制」(三井高陽、史林)があつた、是は古代埃及ユダヤ波斯希臘等の飛脚驛逓による通信逓達の事を述べた「古代郵制の發達」(同氏、同誌)に次くもので近代郵制の基となつた羅馬の郵遞を說きクルス・プブリクスの主要な事や哩石、驛馬の制等をも明かにし「イエスの生涯とその人格」(藤井武著)は基督の生涯に於ける主要なる事實を歷史哲學的な見地から考究したもので單なる傳記より一歩進んで獨自な基督の姿が見られる。

中世より近世にかけては先づ「北歐の海賊と英國文明」(金子健二著)が擧げられる、英國中世の文明を培つたものは北歐に雄飛した海賊(ヴイキング)であるとしてその海賊王朝時代を中心に文學上の影響等を說き更に地中海に橫行したゴツス族にも說き及んだもので「文藝復興期に於ける羅馬復活の思想」(大類伸、史學雜誌)は中世よりルネツサンスに移らんとする過渡期に於ける新時代への翹望、羅馬復活の思想を考察したものでダンテに於ては不明確な憧憬であつたものがペトラルカに至つては熱心に古羅馬の復興を望み國民的自覺を示して居り革命兒リエンツオは

實にこの思想を實行した者と述べ「ロイヒリンとドミニカン派の論爭」（菅原憲、歴史と地理）は十六世紀初頭に中歐就中獨乙でドミニカン派の人々が極端にユダヤ人を憎み彼等の法典等を燒棄せんとした事から當時ヘブライに就き博學の名の高かつたロイヒリンとの間に烈しい論爭が開かれ最後はドミニカン派の敗北に了つたがこの論爭の間に聖書原文の研究が盛となりやがてルッターを出すに至つたと斷じ「クロムウエル傳」（畔上賢造譯）はカーライルの名著の飜譯改版であるが譯者の手になる「時勢及び生涯」「カーライル年譜」等を附してよく原著の精神を傳へクロムウエルの風格を語つた。「大陸に於ける英國憲法研究の先驅」（宮澤俊義、國家學會雜誌）は大陸に於て英國憲法を初めて組織的に研究した者は實にモンテスキュー及びド・ロルムでありその影響は大陸のみでなく黨派的色彩に煩されて居た英本國にも大であつたこし當時の英國の憲法の實際につき名譽革命、權利章典の時代よりの發展を概說して後モンテスキューの「法の精神」とド・ロルムの「英國憲法論」とによる兩者の英國憲法觀を述べその洞察的科學的なる點を詳說したもので讀み應へのあるもの、「初めて公表されたナポレオンの手簡」（ジヤン・アノト、太陽）はフランスのドウ・モンド誌上から譯載した約三十通のナポレオンの手紙で盡くが養女たるオルタンス宛のものでアノト氏の丁寧な說明が加へられて居てナポレオンの性格がよく現はれて居るのが興味が深く「イポリート・テエヌの後繼」（長壽吉、歴史と地理）はフランスに於てテエヌに現はれた國民主義が思想言論ではブールヂエ、バレスを文藝ではシャルル・モーラスをその後繼者として得、デルフユス事件に際しても國民主義的傾向の濃かつた事を述べ、「第十九世紀に於ける米國の移民政策の由來と日本移民」（和田禎純、國際法外交雜誌）は米國内の事情が最初は外國移民の歡迎を必要とした事からやがてそれが「好ましからざる移民」の排斥へと政策が變化した事を說き日本移民の問題にまで論及した。

十九世紀以後の外交問題の研究は史學專攻の人々以外に法科關係の人々の研究が多く每々賑かであるが今年もその例にもれなかつた。先づ著書としては外交及び外交

政策に就ての說明をした上最近の外交問題の各方面に亙つて概說を試みた「外交及外交史研究」(松原一雄著)、普墺戰爭に筆を起し最近の國際關係に至る迄を詳說批判した「近代外交史論」(信夫淳平著)の二著がある。又我國に關係ある外交方面の論文として「明治二十七八年の戰役とドイツの外交」(立作太郎、國際法外交雜誌)はドイツが三國干涉に加はつた事、途中から大いに親日的態度を示した事等は總てドイツが歐洲に於ける利益を考慮した故であるとし「日英同盟の史的考察」(信夫淳平、同誌)は三國干涉後我國に於て日英同盟說が起つた事から三十五年の締結、三十八年の同盟の擴張、四十四年の期限延長等につき諸家の回想、或は手記等によりその經過を述べた。

一昨年出版されたDie Grosse Politik der Europäischen Kabinette 1871—1914は外交史家に緊要なる材料を與へた爲め興味ある研究が發表された。次の諸論文は是に據る所の多いものである。卽ち「ビヨルケの密約」(齋藤清太郎、史學雜誌)はカイゼルがロシアと防守同盟を結び

是にフランスをも引き入れ英國を孤立せしめ以てドイツの世界政策を成功せしめんとし種々接衝の後一九〇五年七月ビヨルケでカイゼルは獨斷で露帝と密約を結んだがロシアの外相ラムスドルフは是がロシアに利少なきを知りフランスの不加入を名として之が廢棄を計りカイゼルの雄圖の遂に畫餅に歸するに至つた經過を述べた。

「獨逸の膠州灣租借の動機について」(坪井九馬三、同誌)も同じ材料を用ひ、カイゼルが英露佛等の極東發展に對抗すべき根據地としてまづ臺灣占領を企て次いで舟山島或は膠州灣と企策し遂に膠州灣と定つた經路を說き「一八七七年の露土戰役前後に於ける國際外交」(大村作次郎、歷史と地理)は倫敦會議に起筆し衰弱せるトルコを圍んで露墺英等の諸國が烈しく爭つた外交を寫し就中その間に處したビスマルクの政策を詳述し、「カイゼルに着ての一新著」(同氏、史林)はカイゼルの個人的性格、彼をめぐる黑幕の人物に痛烈な批評を加へたエミール・ルドウイツヒの「ウイルヘルム二世」の紹介であつた。その他大戰後の國際關係或はファシズムに就ては「外交時報」そ

の他の諸雜誌に多數の論文の所載を見た。

昨年は丁度ロシア革命の十週年に當つて居た爲め是に關する諸方面の著述が輩出したのは注意すべきである。まづ「露西亞社會運動史」(伊藤秀一著)は一八六一年から大革命までに亙りロシアの社會思想の發達を見つゝ社會運動を概說して革命の由來を明かにせんとし「ロシア革命史論」(ソコロフ著、荒川實藏譯)は一九〇五年に筆を始め十一月革命の記述に詳細でありソヴィエート政府の現在にまで及んで居「ソヴィエートロシアの歷史地理的研究」(淺野利三郎著)はロシアの建國、民族の形成から說き起し、ソヴィエートロシアの組織から外交政策にも及んで居るから大戰後のロシアの概略を知るに便利であり且つ新農業法典を附した。「三月革命から十一月革命まで」(今井政吉、東洋)は革命の當時ペトログラードに在つた筆者が實地に見聞した革命の實狀を活寫して興味深く「三月革命回想斷片」(大竹梅吉、同誌)は革命經驗者諸家の回想錄により三月革命の原因を考察し「革命ロシア十年の經過を見る」(清澤洌、中央公論)はロシアに眞の共產主義なく勞農政府の下に古きロシアの國民性の不變に存せる事を述べた。

美術史方面に關するものとしては「伊太利みやげ、美術をたづねて」(大類伸著)がある。多くの寫眞版を挿入しよき解說と相まつて著者のルネッサンス美術巡禮を如實に語り、「伊太利紀行」(太宰施門著)はフランス文學諸家のイタリア紀行に關する研究を主として之に著者の見聞を加へて編まれたもので、挿入の寫眞と共に興味深く「ローマ式及びゴシック式美術について」(鳥居幸子、太陽)は建築と彫刻の二方面に分けて平易に解り易くローマ式、ゴシック式の特長、差等を說明した。又「近代美術史潮論」(板垣鷹穗著)はフランス大革命以後の歐洲の美術史潮を總括的に說いたもので古典主義ロマンチック寫實主義印象主義からセザンヌ、ホーホを經てピカソに至るまでを民族及び時代と言ふ點を注意して述べ民族の藝術意欲(クンストヴォルレン)に重きを置いたのは類書に拔んづるものであつた。この外例の壹圓全集に促されて「世界美術全集」(平凡社)の發刊が企てられ既にルネッサンス及びビザンチ

ン時代の二册を刊行した。

各時代を通じての一般史的な著述も割合に多く「歐洲經濟史」(瀧本誠一著)は中世の經濟狀態から初めて莊園(マナア)、ギルド等を說き諸家の經濟學說を述べ近世に入つては產業革命以來ビスマルクの社會政策に至り歐洲の經濟發達の跡を辿つて要を得、「社會經濟史原論」(黑正巖譯)はマックス・ウエーバーの名著の譯であるが獨特の見地から社會現象を統一した原著の聲價は言ふまでもないが、よくその全部を移した譯者の努力に謝せねばならない。「政治思想史」(今中次麿著)は未だ上卷が發賣されたのみであるが希臘時代からルソーに至るまでの政治思想を著者の所說により體系づけて入念に蒐錄してあり「英國憲政史」(占部百太郎著)はサクソン時代から最近に至るまでを含み憲政史として憲法の發達進化を說き諸家の說を充分に引照し且つ興味ある說述を以てした好著であり「ドイツ思想史、下卷」(チーグレル著、伊藤吉之助、飯田忠純共譯)は昨年飜譯出版された同書上卷に次ぐもので一八四八年の革命時代から大戰前までのドイツ國民の精神生活の諸態を語りビスマルクに關し、又社會主義に關しても說述して居り「カトリック思想史」(フービー著、戶塚文鄕譯)はヨゼフ・フービー編のクリストウス(世界宗教史)中の基督教に關する部分の飜譯で新約時代から現代までに及び世界文明史に於ける基督教の地位の重要さを物語つて居、教會に關する主要人物たとへばフランシス、ロヨラの如きを描いて興味が深く決論にはカトリックの有する抱負を斷じて居る。「西洋史概說」(山中謙二著)は史實の詳述よりも寧ろ時代の推移を描いて西洋史の史潮を明かにせんとしたもので高等程度の學生の好參考書である。尙この他昨年は出版界に圓本の大流行であつたのが影響して既刊のウエルズの「世界文化史大系」(北川三郎譯)が一九二六年版により飜譯刊行され早稻田出版部からは「通俗世界全史」が廉價版で再刊され前年發行した「興亡史論」の叢書も購讀者の再募集をした。コフマンの「人類史物語」(鈴木厚譯)も譯出され世界文化史の通俗化されたものとしてよい讀物であつた。〔猪谷〕

昭和二年度に於ける斯界の主要なる業績の一々を顧みると共に此の短時日に於いて斯學の研究調査が如何なる方面に興味を惹き從つて前年來この連鎖の進境が將して那邊に向つてゐるものであらうかを知りたい。

繰り返して云ふまでもなく本邦の石器時代究明の先驅をなす人骨の發見は漸く其の出土數を減じ、今や該人骨の測定に基く論據が甚しく擡頭して來た。此種の基本的調査は吾人の遺物遺蹟を立脚とする考古學的見解によつて其の最後の判定を下さるべきものでなければならぬ。この人種問題はしかく輕々に說き去るべきものでないと考へる。石器時代研究の一般論考に「石器時代に關する考說」(清野謙次、民族)「日本石器時代の穿顱頭蓋に就て」清野謙次、平井隆、人類學雜誌)あり、前者は日本石器時代主要民族の渡來を沿海州と朝鮮經由との二假定を認め、これに對應する遺物の發見を將來に期し、他方繩紋土器を以て本邦固有の發生であるとす後者は備後大田、備前粒江、三河吉胡の貝塚發見にかゝる穿顱頭蓋を人類學的見地から說明して生前の手術によるものとし、斯かる風習が本邦當代に流行をなし、恐らく信仰的動機に基いて行はれたものであらうとする「現代日本人々骨の人類學的研究骨盤の研究」(宮本博人、同誌)「人類血液の類別と人種」(長谷部言人、同誌)「血淸學的見地より見たるアイヌ民族」「人類の分類」(松村瞭、民族)等は人類學的に考察し、「アイヌ民族其の起原並に他民族との關係」(小金井良精、人類學雜誌)にてアイヌの一種族の形式なるを說いてゐる。要するに人種問題は從來の土俗、言語等を立脚とするアイヌ說に對し人骨測定に基く非アイヌ說が益々高潮せられて來たことが注意せられる。

遺物を立脚とする當代のものに北より見て「北海道東北部の人類學的探究紀行」(清野謙次、民族)「陸奥國是川村古居石器時代遺蹟發見の植物質遺物に就いて」(大里雄吉、歷史地理)「羽前最上郡豊里村發見の球形土製品」(柴田常惠、考古學雜誌)「陸前國大木園貝塚に就いて」(齋藤忠、中央史壇)「上野國吾妻郡の先史考古學的考察」(中谷治宇三郎、人類學雜誌)に同地中條永田原發見の彌生式土器に繩紋的のあるものを指適し且つ先史時代の人文地

理學的應用として遺跡と聚落の關係とを高唱する處がある。「陸前國氣仙郡蛇王洞窟の石器時代遺跡」（松本彦七郎同誌）にて女子骨發見遺跡を說き「秋田縣仙北郡上檜木內村の堅穴調査報告」（深澤多市、考古學雜誌）「北相馬印旛、稻敷三郡に於ける貝塚の淡鹹及土器の厚薄分布表」（大野一郎、同誌）「山梨縣北都留郡に於ける史前遺物發見地名表」（高山建吉、同誌）「甲斐國南都留郡寶村の繩紋土器遺跡」（羽田一成、同誌）等夫々の地方報告をなし、「圓筒土器文化」（長谷部言人、人類學雜誌）なるこの陸中を中心にして分布する繩紋土器の特殊なる土器と共存する人骨の研究に基き該土器使用人骨を以て關東及奥羽東南部のものとは異り、畿內方面特に備中津雲人骨と一致する處あるを說きこれにより津雲石器時代人にもアイヌ的特徵を認めるものとする「注口土器の分類と其の地理的分布」（中谷治宇二郎、人類學教室研究報告）も亦た其の特殊の土器の分類と地理的分布を考察して、當代の文化階梯の一時期を推察せんと試みたものである。「石器時代の死產兒甕棺」（長谷部言人、人類學教室）にて陸前大洞貝塚發見の繩紋系甕棺內小兒人骨の研究から見て多くは死產兒に限られたものであらうとしかゝる風習は又た自ら或る信仰に基くものでなからうかとする「下總國山崎貝塚に對する二三の私見」（八幡一郎、人類學雜誌）は貝塚が淡鹹二種のものから構成さるゝものに對し、相互關係の中にも地形の變化と共に異なりたる文化相を齎らすことを告げ「下總姥山貝塚發掘調査報告」（宮坂光次、八幡一郎、同誌）「姥山貝塚發見の彩文土器」（八幡一郎、同誌）は共に先年度發掘せる遺跡遺物に就いて記述するものであつて、前者は當代の完全なる住居址を發掘したるものゝ概報をなし、この發見が導引をなし關東諸地方に類似の發見を促し「石器時代の住居阯」（柴田常惠、谷川盤雄共著）の考證を見てゐる。駿遠地方の當代研究が著しく着目せられ、「南伊豆に於ける考古學的資料」（中谷治宇二郎、人類學雜誌）は同國加茂郡地方遺跡を叙し特に下津村に於いて四個の窯跡ある住居阯を報じ「伊豆半島の遺跡遺物」（谷川盤雄、史跡名勝天然紀念物）は一般的に伊豆を紹介し「三浦半島に於ける石器時代遺蹟」（谷川盤

雄、國學院雜誌）には同半島の東部は繩紋式系を西部は彌生式系なるを注意して、文化移動の結果なりとし、而して當地方の遺物を考察して當代の後期に屬するとする「神奈川縣中郡大根村の石器時代遺跡調査」（谷川盤雄、歴史地理）「三河國櫻井村堀内貝塚」（柴田常恵、同誌）「神奈川縣下新磯村字勝坂遺物色合地調査報告」大山柏著）等がある。何れにしても當地方は兩者土器の接觸する文化相を示現する處として興味ある地域たるを失はぬ「日本海々岸に於ける石器時代遺蹟の型式」（後藤守一、考古學雜誌）に於いて當方面に存在する砂丘遺蹟として尚ほ砂丘に埋沒せられざるもの、或は活動せる又は中止せる砂丘上にこれあるを說き必しも風力の破壞と運搬によつて成されたるものでないことを論じてゐる。「越中氷見朝日貝塚人骨發掘豫報」（岡本規矩男、大井敏雄、二井一馬、人類學雜誌）は指定地境外に接して更らに當代人骨を發見せるものである。「近畿地方に於ける繩紋土器の研究」（直良信夫、考古學雜誌）にて播磨大歲山遺跡を中心として叙べ、文樣、形態、燒成及び彌生式土器との關係に及ぼしてゐる。南に入り「豐後國直入郡地方の石器時代の遺蹟と遺物」（長山源雄、同誌）「筑紫平野に於ける繩紋土器系文化」（坂本眞鈴、同誌）等が散見するに過ぎない。而して當代の遺物を對象とするものに「先史遺物に於ける土製動物に就て」（小此木忠七郎、人類學雜誌）「石器時代の木製品と編物」（松山壽榮男、同誌）あり、繩紋土器の圖錄として「鐘秀館藏日本石器時代土器選集」（下鄕共濟會印行）「日本原始工藝」（工藝美術研究會印行）等を特に擧げられる。又た「先史學研究」「自然人類學概論」（長谷部言人著）は先史考古學が人類學と相待つて究明さるゝべき一般的論述として擧ぐべきものである。以上は主として當代の繩紋式系のものであるが彌生式系のものとして「那覇市外城嶽貝塚發掘報告」（小牧實繁、人類學雜誌）は琉球荻堂貝塚と性質も同じくするものであることを明にしてゐる。「西日本の彌生式土器の本體に就いて」（森本六爾、考古學研究）は石器時代土器とすることに疑を入れたるものである。金石並用時代の調査は近時著しい進歩を見せてゐる。就中北九州方面の當代遺跡研究は何

を措いても其の中心地たるを失はぬものであつて、當代の推究が本邦に於ける斯學の進境を促すものであることを信ずるものである。「クリス形鐵劍及漢式鏡の新資料」（中山平次郎、考古學雜誌）は筑前國朝倉郡夜須村字峰の甕棺內部及外部發見の遺物を細叙するもので甕棺內遺物出土の異例として注意さる。「須玖岡本の遺物」（中山平次郎、同誌）も同じく甕棺內發見地として著名なる地域を總括的に記し、「須玖岡本の鏡鑑增補」「三乳重圈葉文鏡に就いて」（中山平次郎、同誌）は新に出土する須玖發見の該遺物に就いて論考し前漢式鏡であることを明にしてゐる。「井尻及寺福童の甕棺」（中山平次郎、同誌）は筑前國佐井村及び筑後國小郡村の兩者遺蹟を紹介するものである。この特殊なる甕棺の九州以外の地方に出土するものゝ關聯はこれまた見逃すことの出來ないものであつて、「周防國山口町西白石の大甕」（弘津史文、同誌）「合口式圓筒棺の一二の資料」（直良信夫、考古學研究）後者は古墳關係のものであることを告げてゐる。「一種の合口甕を出したる松本市宮淵遺跡に就いて」（兩角守一、堀內千萬藏、考古學雜誌）は同地方の先史時代遺跡の中に發見する彌生式系統のものである。「尾張國丹羽郡西成村大字馬見塚發見の石器及彌生式土器」（林魁一、同誌）も亦た甕棺二個、玉類を容れたる彌生式土器等を述べ「長門富任に於ける青銅器時代墳墓」（森本六爾、考古學研究）「甕棺に關する一考察」（森本六爾、史學）の二者は何れも甕棺を中心として其の考證を試みたるものである。この當代の主要なる遺物として銅劍、銅鉾乃至銅鐸鏡鑑に關するものとして「讃岐國三豐郡二ノ宮大字羽方西ノ谷發見の銅鐸及銅劍とその出土狀態」（上原準一、考古學雜誌）「新に問題を提供せる讃岐の史蹟」（岡田唯吉、史蹟名勝天然紀念物）は共に同一の出土遺物に就いて記し、「本與寺所藏の銅鐸」（直良信夫、考古學雜誌）「播磨加古郡望塚の銅鐸出土の狀態に就いて（直良信夫、歷史地理）「遠江國長谷發見の銅鐸に就いて」（西鄕藤八、考古學雜誌）等それ〴〵記すものがある。「銅鐸の研究」（梅原末治著）は從來發見せられてゐる遺物に就いて其の狀態の一切を網羅する資料編としてほゞ完成を告げたるもの昭和初頭に

於ける斯學の最も紀念すべき刊行と云はねばならぬ。「多紐細文鏡考」(森本六爾、考古學研究)は新に河内から發見さる此式鏡鑑を基として大和吐田郷、長門富任、朝鮮慶州、沿海州等出土の類別を形態、文樣、伴出遺物等の方面から考證して銅鉾銅劍によつて表徵せられる文化區域の所産とし倣製鏡なりとする「日本太古に於ける青銅文化」(高橋健自、考古學雜誌)は銅鏃、銅鐸、銅劍、鉾の型式分布等を述べ、先秦の青銅文化が鏃の形式により山陰地方に端を發し、更に近畿に入つて一中心をなし銅鐸を發生し茲に獨立せる民族性を發輝し、支那前漢代の銅劍銅鉾は朝鮮を經由して北九州に入りこゝに一中心をなし模造品を造り祖形と異なるものゝ發生を告げたものであらうとする。

次に原史時代として遺跡を紹介するものに「埼玉、茨木、群馬縣下に於ける指定史蹟」(內務省)は題目の如く總括的にこれを記述し「古墳墓壁畫の一二に就いて」(高橋健自、考古學雜誌)に出雲布智、常陸吉田の古墳石室內壁にあるものを說き着裝上に就いて考證す「東京市の南郊に於ける原始時代遺跡」(谷本光之助、同誌)「家形彫刻を有する横穴」(谷川磐雄、同誌)「武藏南郊に於ける特色ある横穴」(森本六爾、谷本光之助、中央史壇)「出雲國簸川郡莊原村塚山古墳」(島田貞彦、歷史と地理)(野津左馬之助、史蹟名勝天然紀念物)にて木製櫛の發見を述べ「聖陵山古墳とその遺物」(渡邊九郎、直良信夫、考古學雜誌)に播磨國加古郡野口村の該古墳の構造を記し、銅鏃十數本の伴存を明にするもの、「大和伴堂の遺蹟」(大橋常彦、考古學研究)は近接して發見された家型埴輪出土地、和銅錢納入の骨壺出土地等を述べる。「南豆に於ける特殊遺跡の研究」(谷川磐雄、中央史壇)として同所朝日村吉佐美字宮尾の遺跡を叙し出土品である土器の葉紋土製曲玉、土製鏡等が何れも祭祀的意味のものなりとし其の築營も奈良期に置いてゐる。「筑前漆生の古墳」(柴田喜八、考古學雜誌)は夔鳳鏡、四獸鏡、甲冑、杏葉を出せる三個の古墳を紹介するもの遺物を記述するものに「須惠器家の新發見」(後藤守一、考古學雜誌)とし紀伊國海草郡有功村六十谷發見の該器を紹介し、伴出土器に朝

鮮系を認めてゐる。「一圖表の解釋（後藤守一、同誌）とし本邦古墳發見の鏡鑑數の概數から古代文化圏として大和、北九州、上毛の三地方を認め、更らに倣製鏡出土の分布から支那大陸との關係を論述するもの「我が上古時代に於けるガラス」（後藤守一、同誌）は本邦に傳來する系統を西域乃至印度より支那を經て來るものとし、本邦の技術は練ガラスを主とし所謂御吹王を以て吹ガラスとするは誤れりとする「日本原始繪畫」（高橋健自著）は本邦に於いて從來注意せられてゐる遺物に表現された繪畫的圖樣を網羅するもの「日本上代文化の考察」（中村久四郎森本六爾著）に本邦發見の特殊遺物である櫛其他の裝具を對象として說けるもの「出雲上代玉造遺物の研究」（濱田耕作、島田貞彥、梅原末治著）は出雲玉造の玉砥製作趾の研究を基本として玉の問題に觸れ、比重の測定によつて硬軟兩性を推し、其の渡來を考證するものである。「四神を附する齋釜發見の二子古墳」（諸田八百七、中央史壇）に群馬縣勢多郡荒砥村存在の前方後圓墳發見例を擧げてゐる。如上は古墳關係の主要なるものであつて、古墳調査として組織的のものを見ることが出來ないが、特殊なる遺物を對象として基本的の考證に向つてゐることを否定することは出來ない。各地方の史蹟調査は此の間にありて報告の出刊を見るものが少くはない。曩きに擧げたる內務省史蹟調査報告を始め、京都府、兵庫、熊本、長崎、山口（山口高等學校鄕土史研究會）栃木、大分、福岡等を主要なるものとす。其の內容は石器時代から有史時代に亙るものあるが茲に一々を記述することは省略する

扨て歷史時代に入ると「再び下野に於ける板碑に就いて」（丸山瓦全著、古學雜誌）「下總中山泰福寺の日祐自書の板碑」（三輪小陽、同誌）「所謂文祿在銘の板碑」（大里雄吉、同誌）の武藏北豐島郡板橋町のものを記す板碑がある「滑石經に就いて」（石田茂作、同誌）「二三の土製多重塔に就いて」（谷川磐雄、同誌）「土塔に就いて」（石田茂作同誌）は土塔に二系統あり一は印度に發し、支那朝鮮を經て白鳳奈良時代に盛行し、他は本邦固有のもので奈良鎌倉、足利各時代に行はるゝものとし眞言宗關係のものであるとする。「四王寺の來歷と遺物の發見」（島田寅次

郎、史蹟名勝天然紀念物）に福岡縣美町四王寺發見の經塚遺物を叙し經筒の形式が異數とされる「山城國愛宕郡花背村出土の經塚遺物に就いて」（鳥田貞彦、歴史と地理）等の經塚關係あり、「延暦十五年の禁銙帶以支鑄錢也」の禁令の解釋に就いて」（入田整三、考古學雜誌）は朝鮮慶州發見の五銖錢を銙帶に應用する遺物から基いて日本後紀にある禁令が奈良平安にかけて錢貨を銙帶にするものゝ結果として生み出されたものであらうとする。更らに寺阯關係では「相摸國府の位置に就いて」（沼田頼輔、同誌）「相摸國分寺に就いての一考察」（柴田常惠、史蹟名勝天然紀念物）の前者は石清水文書から國府は和名抄にある如く始め大住郡にあつたが後ち中郡に移りしことを考證するもの、「廢寺遺跡に於ける塔婆心礎の研究」（上田三平、歴史と地理）は大和を中心として河内、近江、山城に於ける各寺阯にある塔婆礎石の樣式の變化を詳述し、「法隆寺伽藍の礎石に就いて」（上田三平、史學雜誌）法隆寺伽藍の礎石が種々の形式を有し一建築の礎石に於ても各樣式あるを指適せるもの、「圖式伽藍解析法による山田寺草創伽藍復原圖」（服部勝吉、歴史と地理）は從來建築史家の試みざる處によりて説明を與へ「法隆寺に關する最近調査の結果に就きて」（喜田貞吉、史學雜誌）に水道工事により發見する資料に基き講堂經藏附近の燒土、塔婆心柱空洞内發見の葡萄海獸鏡及び礎石の形式的研究より天智以後の再建とするものなりとし記錄を誤なしとする「東大寺大佛殿須彌壇内に於て發見せる遺寶に就いて」（上田三平、寧樂）「正倉院御物鏡の製作に就いて」（廣瀨都巽、同誌）の後者は其の製作手法は所謂複範式初鑄で本邦鑄制でなく、又た工人に秦、辛、狛の姓字あるにより恐らく支那製であらうと考へる。

如上は本邦に於ける先史、原史時代及び其の以降のものゝ概觀を擧げたものであるが、今ま此等を通觀するに昭和二年度に於いては先史、原史兩時代に關る主要なる發掘調査に乏しかつたことが注意せられる。されど兩時代の遺物遺跡を基本として綜合的見解のものが漸次擡頭して來たことは斯界の方向として見逃すべからざるものと云へる。「石器時代の住居阯」「人骨測定を基本とする

人種問題」「銅鐸の研究」「甕棺の調査」「玉類の研究」「原始繪畫」乃至「考古學講座」等これに外ならぬ。而して此等の主要題目中「人種問題」「銅鐸の研究」「甕棺の調査」等は引續き斯界の注目題目であらう。

更らに朝鮮及支那方面を見るに前者に於いて「朝鮮の新羅燒」(濱田耕作、民族)「慶州瑞鳳塚の發掘」(小泉顯夫史學雜誌)「梁山夫婦塚と其の遺物」(朝鮮總督府)等は南鮮にかゝるものである。瑞鳳塚は大正十五年度に於ける發掘の概況を記したもので、梁山夫婦塚の報告は其の副葬狀態に於いて從來發見せられたる南鮮の古墳中最も整美したるもの其の横口式石室の奥室に男女の主體を置き家族墓であることを明にし、男子は金冠、純金耳飾(太輪)頸飾(青色玉)銀指環、銀銙帶、金銅沓、環頭太刀、金銅步搖等を以てし女子には寶冠(樺皮製銀箔立附)、純金耳飾(細輪)頸飾(色彩と形狀に富む玉)銀釧、腕玉、金銀裝刀子等で性格によつて加作されたことを明にしてゐる。北鮮に關しては大正十五年度の「王肝墓古墳發掘調査報告」が今や其の出刊を見るに至らんとしてゐる。

支那方面では「周代貨幣考」(黑田幹一、考古學雜誌)に布刀の形式的變化を記し、方足は尖足の變化とし、尖足布首部の二竪文は骨器に其の源を發するとしてゐる。「支那杯の器形と用途とに就いて」(原田淑人、民族)は杯の器形を說明し、其の用途に關しては畫象石等から見て槃を容るゝ器物なりと判し、土杯は恐らく副葬用のもので、木漆金屬器のものを使用したるならんとす「支那に於ける刻石の由來」(藤田淑人、歷史と地理)は武氏後石室第三石のものを宋玉の招魂賦の詩句から考察して幽界描寫となし畫象石の歌舞宴樂圖を現世享樂思想の表現であるとせるもの「犍馱羅彫刻と六朝の泥象」(濱田耕作、史林)は兩者の關聯を說明し「關東州旅順管內山頭村會大台山遺跡」(森修、考古學雜誌)は「貔子窩の土器」(濱田耕作、民族)と相關聯する處あり、後者は支那に於ける本邦考古學研究の組織的發掘の主要なる色彩土器に就いて論述するものである。遺跡發掘は「貔子窩遺跡發掘記」(島田貞彥、民族)昨年度に於ける斯界の最も重要視さるべきも

のであつて、本邦の斯學が南北兩鮮の組織的發掘の結果多大の刺激を齎らし究明さるゝ處の多かつた如く換言すれば大正後半に於ける本邦の原史時代調査の隆運はこの朝鮮の發掘の功績に待つと云へる。これと同じく、昭和の本邦考古學の進路を開發するものは恐らく支那の遺物遺蹟調査が其の主導となるべきものであることを痛感するものである。〔島田〕

地理學界

年々歳々花相同じといふ通り、我地理學界も特に本年度はと、取り立てゝいふやうな華々しさはなかつたとしても、着實に且順當に進歩の道程を歩みつゝあることは疑ふべからずであつた。まづ自然地理の方面から一應その概觀を試みることにする。第一に、注意に上ることは地殼構造上の議論が昨年と同樣に學界の注目を惹いたことであつて、「地質現象相互關係の解釋法」(小川琢治、地球)は地殼の表面に於て見らるゝ火山岩をはじめ、あらゆる地盤の變化造山作用の如きは地球の深所に發する原動力を無視しては考へられぬと論じ、「日本群島の地貌に及ぼす地内力の結果」(同人、同誌)は地下に深發するエネルギーの傳播して地殼表層に到達する手續を考へ、鍋狀陷沒に似た火山構造線をとき、併せて孤狀海岸の成因に及び、「東亞孤狀構造線の新解釋」(同人、同誌)はさうした深發性の原因から解釋さるべき北上、阿武隈高原の海岸線や朝鮮半島、滿洲支那の孤狀海岸、支那内陸の孤狀構造を論じ、「造山造陸兩作用の性質」(同人、同誌)も亦同じく小川教授のこれらの作用に對する新しい說明であり、「造山作用の地震地質學的解釋」(同人、同誌)は岩漿の上昇運動が地震の原因であるとなし、「直線狀構造線及地内力效果の綜攬」(同人、同誌)は火山作用に因る放射狀坼裂と地震に起因する放射狀坼裂を對比して、地殼表層の現狀に達する深發地震の原因に及んだ論である。次に「地形の渦卷と土地の割れ目」(藤原咲平、地學雜誌)は飴の樣に延びる性質の物體では渦卷により、固い割れ易い土地では雁行的割れ目になるといふ實驗から、北太平洋に地形に及ぼす歪力があつて、これらが日本灣に加はり我國の起震力造火山力の宗をなすものであるとき、同

じく「千島灣南西部に於ける雁行火山列の漸移的變化に就きて」（德田貞一、地學雜誌）は實に前者の取扱つた雁行構造ミ字形の火山列を說明し、橫づれの外に底づれの影響があるであらうと說いてある。次に「褶曲と陸塊運動」（大橋良一、地理學評論）は秋田附近の地質構造からジウスの說明に對する反駁を試み、「出羽山脈の發育史と陸塊上昇說」（大橋良一、地理學評論）は主として男鹿半島の上昇について說明し、「地震斷層と雁行裂罅」（加藤武夫、地理學評論）は我國の如き絕えず大きな壓縮力が働く土地では、徐々に蓄積するストレインの爲めに、割合に淺い所に地震の原因があるとて、例を鄕村斷層にとりその線の西側の地塊が動いたとすれば雁行裂罅が出來うると考へられると論じて、深發性地震といふことに幾分の疑問をのべたのであつた。かやうに地質構造や、地震や、造山作用等に關する國內の議論が喧しくなると同時に學界の視聽はこの方面の學說に注がれ、「造山論の史的瞥見」（大谷壽雄、東洋學藝雜誌）に於て世界に於ける最近二三十年に歐米の學說がいかに說明されたか、隆起、

收縮、漂移、遷移等の考が誰れによつて述べられたかを明にしたと同時に、「機巧に關する研究と曲隆の自然的摸型」（德田貞一、地理學評論）はウィリスの實驗によつて逆向衝上や正規衝上の運動を明にした例により曲隆の自然模型が大正六年五月、越後の鯖石に起つたことをのべた。今この種の造山問題に關し泰西の新說の紹介されたものを列擧すれば、就中「構造地質學講話」（デーリ原著、本間不二男譯）がデーリの Our Mobile earth を譯述したのを筆頭として「我が世界の構成」（都留一雄、地學雜誌）はチャンバレン、モールトン敎授の小惑星說の構成の概念がいかに地質學上の問題の取扱ひに影響するかをしめし、「ジョーリー氏の地殼運動說」（本間不二男、地球）「デー氏火山活動の原因」（山根新次、地球）「岩漿內の均一平衡と火成岩成生作用に對する關係」（バウルニグリ、地球）「地球の大形態成因に關する楔狀說」（帷子二郎、地球）「アルプスとウエヂナー說」（岡山俊雄、地理學評論）「コーベル氏の山脈論」（帷子二郎、地理敎育）、「バレル氏大陸切斷作用」（津田秀郎、地理敎育）「バルー氏造山問題概說」

（山根新次、地球）「ハールマン氏の振動説」（大谷壽雄、地理學評論）、「地球の構造」（北田宏藏、同誌）等がある。地震に關しても同一の傾向から多くの論説が現はれた、第一に「丹後峰山地震の現象とその解釋」（小川琢治、地球）は郷村斷層の單一でなく、下間斷層、高橋斷層、生野内斷層、長岡斷層、安村斷層杉谷斷層等各種の線が追跡されることから震源の頗る深かるべきを推論し、「丹後峰山地震に現はれたる起震源と地弱線」（中村新太郎、地球）は郷村斷層を起震線とし、共鳴地弱線としての四辻斷層を説明し且この地震を濃尾地震と比較し、「奥丹後地震の際海岸の昇降運動」（田中館秀三、地學雜誌）は淺茂川久美濱地塊の傾動を記し、震源をこの地塊の北端海中の部より加はつたストレッスであるといふ説を立て、「北丹後地震成因概説」（國富信一、東洋學藝雜誌）は郷村斷層を説明し、「北丹後地震略記」（同人、地理教育）、及「地震の震源地はいかにして測定するか」（同人、同誌）は「北丹後地震斷層瞥見」（淺井治平、地理教育）と共に北丹地震の説明であり、「紀伊半島西側に頻發する地震に就て」（田口克敏、地理教育）は紀伊水道の構造線が注目すべき地點であるといひ、「琵琶湖北部地體の地形學的斷層構造」（山崎、多田、地震研究門彙報）はこの附近の活動斷層について詳説し「臺灣臺南州鹽水地方の地震に就て」（市川雄一、地學雜誌）は昭和二年八月二十五日午前二時の鹽水街地震をのべ、「秋田斷層」（大橋良一、地理學評論）は秋田の斷層をのべて、天長の地震をこき「地震損害輕減の可能性に就て」（小川琢治、地球）は地震保險の必要を絶叫し、「奥丹地震」（多田文男、地理學評論）は二種の震源を考定し、「根尾斷層に就て」（中村新太郎、地球）は明治二十四年十月の濃尾地震の遺跡を説き、火山に關しては「十勝岳火山の活動」（多田文男、津屋弘逵、東洋學藝雜誌）があつて、大正十五年五月二十四日の爆發と泥流との成因を論じ、「隱岐島後の火山岩に就いて」（春本篤夫地球）はその火山活動に三期を分つべきことを論じ、「温泉式火山とカルデラ式火山」（大橋良一、地理學評論）はこの二種類の火山は地下水流の方向による區別であるとて、温泉のでる火山は地下水が外に流れるが、カルデラ

式では中央の火口底へ水が入るためにいつかは再び活動すると論じ、「日本群島に於ける火山の分布並に地形學的火山群の設定」（今泉政吉、地理學評論）は日本の各地域に亙る火山群の總括であり、「マルチニク火山の破裂に就て」（松山基範、地球）はラクロア教授の京大での講演の概要であり、「温泉の試掘に就て」（石川成章、地球）は福岡の武藏、鳥取の吉方、東鄕、皆生、和歌山縣の鉛山、湯崎等の試掘の結果をのべ「玉川の毒水に就きて」（齋藤文雄、地學雜誌）は秋田縣仙北郡田澤玉川の毒水（實は温泉）の害をいかにして除くべきかを論じてある。

轉じて地形學方面をみると、「越後に於る僞沈降現象と最近の海岸線移動」（德重英助、地理學評論）をはじめ、「關東構造盆地周緣山地に沿へる段丘の地質時代」（矢部長克、青木廉二郎、地理學評論）は關東平野田邊の山塊にある上下の二段丘の成因から同平野の最近の地史を考定し「東北裏日本海岸地方の所謂海蝕臺地に就て」（外山四郎、地學雜誌）は共通の第三四層の上に二〇米から三〇〇米乃至四百米に至る數段の臺地があることを論じ、

「桂川沿岸の地形及河岸段丘の研究」（花井重次、地理學評論）は丹澤山塊附近の斷層地塊を論じ、「四萬十川流域に於ける曲流の研究」（大塚彌之助、地理學評論）はこの地方の筌入曲流であることをとき、「阿武隈山地形素描」（北陵學人、地球）「丹波胡麻鄕附近の分水界の地塊」（上治寅次郎、地理教育）「近江國野洲下流の地形」（宮井嘉一郎、地球）「信濃中央高臺の地質及地形學的意義」（本間不二男、地球）等何れも地形の研究であり「相摸原」（田中啓爾、地理學評論）はこの地方の地形と人文との關係を明にし、「奥丹後半島の海岸地形」（多田文男、地理教育）はこの地塊の傾動作用に成ることをのべ、「山陰海岸砂丘所見」（小牧實繁、歴史と地理）には同海岸砂丘の發達をのべてある。猶又特殊な方面では重力偏差に關して「重力偏差の分布から見た鹿兒島灣周圍の地下構造」（松山基範、地球）や「關東地方の重力偏差」（熊谷直一、地球）があり、「大連海氷の觀察」（新帶國太郎、地球）「秋田縣長走風穴について」（荒谷武三郎、地球）「宍道湖の鹹度問題」（小牧實繁、地球）「有史時代の氣候の變遷」（岡田武松

地理教育)「武藏野の水系と池」(淺井治平、地理教育)日本海の海洋」(神谷尙志、地理教育)「野尻湖の研究」(田中阿歌麿)「太陽曲線」(今村學郎、地理學評論)「我國新舊兩三系の分布」(横山又治郎、地學雜誌)「鑛山地理學草案」(渡邊萬次郎、鑛業)「朝鮮半島の東西に孤立する欝陵島と大黑山島との植物帶の比較」(中井猛之進、東洋學藝雜誌)「鑛産物の地質的及地理的分布」(加藤武夫、地理教育)等見るべきもの尠からず。

次に理論の方面を一瞥すると「地理學の性質に就て」(小野鐵二、史林)は自然の景觀のみならず、人文景觀をも含む地域又は地理區といふものを考察すべきであるとのべ「日本地理區」(田中啓爾、地理評論)はさうした考から、日本の地理區をいかに區分すべきかといふ豫察案であり、「讀圖について」(田中啓爾、地理教育)は地圖をよむことの地理研究に必要な所以を明にし「佛蘭西に於ける地學研究室瞥見」(寺田貞次、地球)「北米合衆國に於ける地理學界」(寺田貞次、地球)は以て他山の石となすべく「地人相關の理法的研究」(内田寛一、地理教育)は地人の關係とその差別性、共通性をのべ「經濟地理調査方法」(小野鐵二、地理教育)は實地調査の指針を示してゐる。猶又本年に於て「地理學通論第一册」(高橋純一)地文、天文の總論が上梓されたことを記して置かねばならぬ。

つぎに人文地理學界の業蹟を述ぶれば、歴史地理の部門に於ては「大大阪の搖籃時代」(岩橋小彌太、大大阪)は豐公築城以前九十年間の大阪古地理を論じ、「大大阪の土地が出來るまで」(喜田貞吉、大大阪)は更らに遼遠な難波江の時代から新淀川に至る迄の河道變化と陸地の發達をしるし「九州刀工分布の歴史地理的意義」(小川琢治、地球)は彦山刀工の始祖が、太原府の鍛冶であるとのべ古い支那との交通を論じ「宇治茶園史概説」(藤田元春、史林)は栂尾茶から宇治茶への史的變化を考察し、「河内平野の古地理」(小牧實繁、史林)は孔舍衙村の貝塚に淡水蜆貝が多いことから古代の淡水湖が河内平野にあつたことを明にし、「西攝平野の發達」(伏見義夫、地理教育)は西宮一帶の沖積作用の甚しい跡を明にし、「日本と暹羅との貿易」(新村出、史林)は德川初期に鐵砲、白焰硝、暹

羅染、鹿皮、鷄、米等の輸入があつたことを說き、「李朝中期の物產」(善生永助、朝鮮)は李朝時代中期の文獻から物產を各道郡縣について記述し、「二百年前の朝鮮物語」(松田甲、朝鮮)は享保頃の通詞松原新右衞門の草稿で、當時の日韓貿易の狀況を明にし、「日明貿易の發展に就て」(三浦周行、史林)は足利時代の海外貿易を論じ、「支那物產の研究と古書上の記載」(西山榮久、地理教育)は支那古文書に現はれた物產の研究が必要である例を示す。居住地理學の方面では「白山山麓に於ける出作地帶」田中啓爾、幸田、地理學評論)は積雪の深いこの地方の、一家或は一村擧つて出作する現狀をのべ、「男木島の特殊な自然と人文」(金尾宗平、地學雜誌)は瀨戸內の男木島の部落が飲料水と、鰯漁場との關係から特に東岸に密集部落をつくつてゐることをのべ「ファレンシア郊外と市中所見」(田中阿歌麿、地理教育)はサルレの居構とフアレンシアに於けるムーア人の遺業をのべ、「都市建設の技術」(柳田國男、都市問題)はいかに都市がつくられるべきかを明にし、「北國の農家」(奈良環之助、人文地理)

は冬の北國に於ける詳細な居住地理の各問題を明にし、「樺太の氣候と人口の動靜」(石井逸太郎、地理學評論)は樺太に於ける氣候の居住に及ぼす影響をのべ、「地表の可能的人口密度の問題」(麥谷龍次郎、地理學評論)は米國のハウスホーフェルの經濟地理と人口分布の關係を明にする研究方法の紹介であり。「灌漑用水の一考察」(江畑弘毅、地學雜誌)は栃木縣安蘇郡小見、下石塚附近の湧水枯渴の原因を地質的のものでなくて、氣象學的のものとし外に大地震の影響、河川修理、森林伐採等の間接の影響であらうと論じ、「アイノ民族と其起源並に他民族との關係」(小金井良精、東洋學藝雜誌)はアイヌの民族の起源は不明であつて、アイヌのみが一つの島をなしてゐると論じ、「地と人」(川本達、朝鮮)は對馬の原始林は內鮮の交通交涉の自然史であるといひ「近江盆地に於ける人口分布の一形式」(田中秀作、地理教育)は同盆地に於ける人口、密度及聚落の形態を論じ「人口と聚落との相關々係」(小田內通敏、地理教育)は人口と聚落とを相關係に說明すべしといふ論であり、「八ッ岳山麓」(三澤勝

衛、人文地理）は用水路と新田村落開發の跡をのべ、「聚落と地理」（小田内通敏）は本年に於けるこの方面のまとまつた著述である。最後に「日本民家史」（藤田元春）は日本民家の發達を近畿地方の農家分布の現狀によつて說明し、屋根、間取邸宅の各篇を細叙した後、歷史的に家作の變遷を明め、最後に地理學的に邸宅の變遷、都城の地割から村落の發達を明にしたものである。人口問題に關したものでは「我國人口及食糧問題と滿蒙の開發」（田村謙次郎、滿蒙）をはじめ、「印度の人口問題」（市河彥太郎地理教育）があり、「人口と耕地との關係」（麥谷龍次郎、地理學評論）「讃岐平野に於ける麥稗眞田と叺との生產地帶に就て」（田中啓爾、地理學評論）は共に人口過剩問題を取扱ひ、「オーストラリアの新二州」（山崎直方、地理學評論）はオーストラリアに出來た北方の二州の地理と其人口稀薄の狀をのべ、白人濠州の非を論じ「東北地方市町村別人口密度圖及解說」（田中館秀三、富田芳郎）は新しい立派な分布圖であり、「第二回太平洋問題調査會に臨みて」（山崎直方、地理學評論）は委任統治、人口問題食料問題等に關する日本側の態度の宣明である。氣候に關しては「氣象學一般」（國富信一）が上梓された外に「氣候と人類」（三村信男、地球）が論ぜられ「靜岡縣の農業地理區」（佐々木、人文地理）は靜岡の茶業と氣候との關係を明にし、「函館地方風ヤマセに就て」（松丸乙近、地理教材研究）は東偏風ヤマセの影響をのべ、

地誌的研究では「經濟上より見たる蘭領印度」（增井貞吉）と併せて「ミクロネシア民族誌」（松岡靜雄）は共に注目すべき著作であつて、我民族圖南發展の傾向をかたるものであり、「琵琶湖調査報告」（須田皖次外四氏）「奈良縣に於ける指定史蹟」（內務省）の如きは部分的地誌としてみるべく、「築筑平野の特殊な人文」（金尾宗平、地理教育）は床島堰の築造史であり、「北九州諸都市の都市地理學的考察」（佐々木清次、地理教材研究）、「島根縣の都市」（西田與四郎、地理教材研究）、「福岡の地理學的考察」（金尾宗平、地理教材研究）、「熊本市」（小川此農夫、同）「小野田町」（野津精、同）「川崎市」（森下國松、同）、「大根島の聚落」（祝豐兵衛、同）「ロンドンの市場」（佐々木彥一

郎、地理學評論)「大和會爾地方の考察」(三村信男、地球)「地質學上より見たる北海道の三大都市」(清水實隆、地理教育)等いづれも見るべく經濟地理に關しては

「日本の貿易」(須原伊豫、地理教育)は我國産出重要輸出品の解説であり、「我國南洋發展の現狀と其缺陷」(木村增太郎、地理教育)は南洋に於ける邦人の現況をのべ「支那に於ける石炭石油、鐵の分布」(渡邊萬次郎、地理教育)は、支那の鑛産を論じ「經濟地理の野外研究」(佐々木彦一郎、地理學評論)は靜岡縣を例にとりて説明し「經濟地理の野外地圖について」(佐々木彦一郎、地理學評論)は米國式の研究方法を紹介し、「寒帶地方の征服」(山崎直方、地理學評論)は人類活動の極限をのべ、「石油地質學概要」(大村一藏、地球)は昨年來から連續した長篇の説明であり、「大英帝國の沒落過程」(佐々木彦一郎、地理教育)は英國の世界制覇の經濟論に弱はりつゝある事實をのべ、「燃料問題について」(横堀治三郎、鑛業)は我國の石炭と其改善事業をのべ、「ローヤルダッチ石油會社の世界政策」(下田禮佐、商業と經濟)は蘭領東印度の石油及スタンダードに對するデターヂングの活動、バクー石油の爭覇戰等をのべたものである。

交通地理に關しては「港の位置につきて」(岡田武松、地理教育)は日本の港が風向に支配されて灣の西岸に發達する例を上げ、「シムプロン隧道に就て」(上治寅次郎地理教育)はアルプスの構造と隧道の歪みとを論じ「丹那隧道の地質狀態と現況」(渡邊貫、地理教育)は丹那トンネルの進行を明にし、「横手盆地に於ける聚落の機構と地名の起源」(柴田良一、地理教材研究)は主として交通地理的の説明を本體とし「朝鮮半島東海岸鐵道の經濟的價値と元山港」(板垣只二、朝鮮)は江原道の交通産業を明にし、「航海の話」(米村末喜著)は海上航通の説話であり「未開人種の地圖」(松村瞭、地理教育)はエスキモーの木地圖とマーシャルの海圖との趣味ふかき説明である。こゝで旅行記の注意すべきものを上ぐれば、「南洋ヤップ島旅行記」(坪谷幸六、地理教育)、「九州地方聚落瞥見記」(西龜正夫、地理教材研究)「北樺太採集記」(王貫光一、地球)「熱河赤峰の旅」(鷲淵一、歴史と地理)、「北九州行

脚」（藤田元春、歴史と地理）、「西遊夢錄蘇國」（瀧川規一、地球）、「續南海紀行」（藤田元春、歴史と地理）等がある。最後に「大日本方言地圖、國語の方語區畫」（東條操）のごとき、「東亞大陸圖」（陸地測量部）の出版のごとき、農林省地質調査所から多くの四十萬分一地質圖の出版されたこと等を記して置かねばならぬと思ふ。

〔藤田〕